

子ども学の源流を次世代につなぐ

幼児の教育

[特集] 問い直そう、保育の中のあたりまえのこと
カリキュラムはだれが作る？

[新連載] 子どもたちの「^{いま}現在」を考える
孤立した「現在」と持続する「現在」

[子ども学探訪] 倉橋惣三とキンダーブック
生活と知を結ぶ芸術性

春 2013

since 1901

くらしの素顔

保育の場の子どもたち

秋田喜代美

保育の場の子どもたち

くらしの
素顔

保育実践の現場から著者が感じ考えた園のくらしについての13の思索と、園生活を描いた12冊の絵本の解説より、目の前の子どもの素顔から、園のくらしのあり方、保育の本質を問い直すことができます。



- 著者/秋田喜代美
- 価格/1,365円(税込)
- サイズ/21×15cm
- ページ数/152ページ

「幼児の教育」
園のくらしを育む

連載中

連載第1回～13回までを収録!

10931

ポイント1

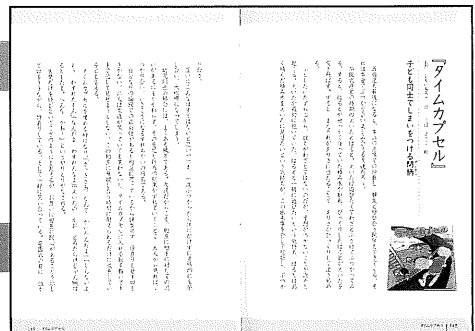
秋田喜代美先生の待望の最新刊!

著者が園の生活に立会い、保育の本質を探った第一部には、日々の保育のヒントとなるエッセンスが満載です。

ポイント2

園の生活を描いた絵本の読み解きが面白い!

書き下ろしの第二部では、定番～新作まで12冊の絵本を研究者の視点で読み解きます。普段読み聞かせている絵本の奥深さに触れて、保育の幅がぐ～んと広がります!





あかい いちご みつけた。
おいしいかな？ 食べてみよう。

子どもの情景

【子ども学探訪】

編輯顧問 倉橋惣三とキンダーブック ⑤

生活と知を結ぶ芸術性 浜口順子 ————— 46

【講演】

「これから生きる子どもたちへ」～津守 眞氏からのメッセージ (聞き手) 高橋洋代 ————— 52

【海外レポート】

イタリア保育“おもいきって”参観記 (2)

「園への両親の参加」 金澤妙子 ————— 58

【報告】

松野クララ記念歴史に学ぶ会 第一回講演会報告 宮里暁美 ————— 63

【アーカイブス】

幼児の教育110年の散策

周郷 博 講演「現代の幼児教育」 - 第70巻第4号(1971年4月)より - 浜口順子 ————— 65

【子ども学のひろば】

学会 研修会情報・読者投稿・エピローグ他 ————— 71

プロローグ カリキュラム不要論 浜口順子

約60年前の本誌(第53巻第2号)で「幼稚園にカリキュラムは必要か」という特集が組まれている。和田実(当時目白幼稚園長)は「終戦以来、幼稚園の教育が、著しく学校化すると共に、其の教育法が、小学校に倣って、学習化して来たことに対して、我等は驚きの目を瞠って居るものであるが、殊に、其の最も著しきは、幼稚園カリキュラムの編成が、やかましく云われて、各地方に於ても、それぞれ特殊なものが、色々発表されて居ること」と当時の状況を語りだす。自発的な遊びを中心とする幼児教育にカリキュラムは不要である。しかし計画

自体は必要……こうした和田の考え方に対して、賛成、反対を唱える論者たちが意見を交わす。そもそもカリキュラムって必要なの? という問題提起、これは今号の特集の趣旨にもつながる。

幼保一体化が進む中、幼稚園に教育課程があるなら、保育園は保育課程でしょう、という流れ。そもそも必要? というような素朴な疑問は、周りの気配をうかがいつ言い出しにくい世の中になっている。しかし60年前も今もさして変わらない。「カリキュラム」ってそもそも何でしたっけ? という話に繰り返し立ち戻るのだ。

目次

表紙の図柄は、お茶の水女子大学附属幼稚園内にある
ステンドグラスの模様をデザイン化したものです。

【写真】

子どもの情景 ————— ①

【目次 プロローグ】

カリキュラム不要論 浜口順子 ————— ②

【特集】

問い直そう、保育の中のあたりまえのこと 9 カリキュラムはだれが作る？

インタビュー 戸田雅美氏（聞き手） 浜口順子 ————— ④

保育者の「表現」としての計画 矢萩恭子 ————— ⑬

だから保育は面白い！ 新井理香 ————— ⑬

おいしいカリキュラムの作り方 辰巳 豊 ————— ⑳

【シリーズ】

子どもが育つ場所を訪ねて

屋敷林の中で自然いっぱいの暮らし 中瀬幼稚園 伊集院理子 ————— ⑳

【実践研究】

私の保育ノートから

子どもを信じて 香田成美 ————— ⑳

児童館の親子と共に 江村綾野 ————— ㉓

【保育エッセイ】

子どもたちの「^{いま}現在」を考える ①

孤立した「現在」と持続する「現在」 本田和子 ————— ㉔

【からだ考】

食べる・つながる・育つ

保育園給食から（後） — 親たちの学び 兼田祐子 ————— ㉔

特集

問

い直そう、保育の中のとあたりますのことの

カリキュラムはだれが作る？



インタビュー

とだ まさみ
戸田雅美氏

東京家政大学教授。専門は保育・幼児教育学。幼稚園、保育園の園内研修に参加のほか、事例を基にした研究にもかかわる。主な著書：『保育者論』（共編著、相川書房）、『保育をデザインする』（フレーベル館）など。

「カリキュラム」って教育（保育）課程のことよね……でも課程って何だっけ、という感じ、ありませんか。

小学校以上だと、教科ごとに学習すべき単元やねらい、学ぶ順番もだいたい決まっています。なので、子どもが何をどの程度習得したかという評価も目に見える形で出しやすい。それに比べて、日本の幼児教育は、小学校の学習の基礎としての心情や意欲、態度をはぐくむ時期とされていますから、目に見えない学びをカリキュラムという筋道に組み立てていくこととなります。実際のところ、保育者は保育計画を立てたり保育記録を書いたりという作業を通して、カリキュラムを見直し修正していると言えるでしょう。その日常的な保育者の作業の緻密さと、落とし穴について、戸田先生は実にわかりやすく語ってくださいました。

聞き手 浜口順子（本誌編集委員）

保育をデザインする保育者のすべ

浜口 戸田先生の『保育をデザインする』（フレーベル館 二〇〇四年）というご著書で、保育計画やカリキュラムについて、デザインという言葉を使って考えていらつしやるのが親しみやすい感じがします。

戸田 多分、デザインという言葉自体は私の完全なオリジナルではないと思います。でも、実践を見ていると、計画は立てているんだけど子どもによって全く変わっていくことも多いし、でも変わって見えるけれどもそれは大きな意味では計画にのっとっているみたいなの、そういうところが面白いなと思いつながらデザインという言葉を使わせてもらったんですね。

浜口 デザインでいうと、保育はレディーメイドではなく、オーダーメイドだと……。

戸田 ピンクの服を着たい人もいれば、緑を着たい人もいる。ふわふわつとしたものがいい人もいれば、ちよつと、もこもこがいいという人も。そういうそ

の人の「こうしたいな」という思いがあるけれども、そこにプロの人が入ることによって、その人がこれがいんじゃないかと思つていたよりも着てみたらもつとこつちのほうが良かったとか。自分ではこれを求めていたわけじゃないんだけど、でもまんざら外れてもいなくて、やつぱりプロが入ってくれてよかつたみたいなの、ありますよね。そういうのが多分、保育者がやっている計画なのかなって思っています。

おままごとをいつもやっている子が、ある時、お姫様になりたくなくてティアラを作ろうとしたら、そこでお帰りになり、終わってしまった。保育者はそこで、多分ティアラっていうものをきつかけにしたら、ほかの子たちもその子の面白さに気付けるチャンスかな、と思う。でもそれは絶対そうしなさいっていうわけじゃない。「環境」というのはすてきなもので、別に指示をするわけではありません。「お城ごっこ」の続きをしましょうか」と直接的に誘うのではありません。でも、保育者は、次の日のために、

ほかの子も作れる分のティアラの材料を用意したりします。それも、今まで出したことのないようなすてきな素材も交せて出しておく。翌日、保育者はさりげなく、「見てー！ 銀色紙見つけたの。こんなのお姫様にどうかしら？」とその子に言うかもしれないかもしれません。その子は多分、より一層お姫様になりたくなるだろう……そういうことを狙いながら環境をデザインする。でも、そのデザインの裏には、その子たちのその後の育ちや見通しもありますし、子どもたちの思いが膨らんで遊びが楽しくなってほしいという願いが先生にある。だから「デザイン」と言いたくなくなってしまったのです。計画というと、何のために何の材料を出すのか、ということが大きくなる。だから、子どもがそれに目もくれないと、計画が違うことになる。「こういうつもりで出したんですけど、今日は外れちゃって」みたいなことになる。いやいや外れちゃいないでしょ、と私は思う。保育者って、子どもが自分から自分の殻を破っていくような動きが出てくるように、保育室や園庭にさりげなく物を

用意していく。こういうことをすごくよく考えてやっている。自分自身がする直接的な援助もとてもよくデザインしている。すごい仕事だなんて思います。その点を保育者自身にもっと気付いてほしいし、気付くことで、自信も持ってもらいたかったんです。

記録の書き方から保育を振り返る

浜口 デザイン画を描く時って、輪郭をスーッと一筆書きしないで、シユツシユツと、こうかな？ こうかな？ みたいな感じで描くような気がします。試行錯誤しつつ決めていくような……。

戸田 例えば、着る人のことをよく知っている人が服をデザインする時に、一枚だけ描くわけじゃない。たいてい何枚か描いてみますよね。それで実際にその人の雰囲気を見た時に、全然違うっていうこともある。デザイン画で見ると八頭身できれいだけれど、私が着ると変だった。着る人とデザイナーが一緒にやっていると変じゃないですか。そこが一番のエッセンス。指導案を書いている時っていうのは、ああか

な、こうかなって書く頭の働きのありながら、三つのデザイン画を描く時は十個くらいのイメージの中できちんとあえず三つ描いているとか、そういうような働きただと思うんですね。

浜口 外れている七個もきつと大事ですよ。

戸田 そうですね。多分そこに共通するものがあるんだと思うんですよ。ばらばらに見えるけれど、デザインしている人も気付いていないかもしれないけれど、何枚も書いているうちに私はこちら辺が気になっていく、あの子とあの子のデザインとしては、こういうのが、そうやって見えてくる。その働きの多分、指導案を書く作業なんだと思うんです。

浜口 同じ人でも書き方をその時いろいろと変えてみるのでしょうか。

戸田 変えるのが普通でしょうね。気になっているグループとか子どもについていっぱい書いて、ほかの子はちょっと薄くなるということもあっていいと思うんです。それは何を表しているのかというと、薄い子たちがどうでもいいのではなくて、今ちよう

ど子どもだけで何とかやれる時期に入っていると私が理解していて、だからそんなに私が何かあれこれ考える必要ないということ指導案が示しちゃう。

浜口 振り返ってみればそういうことだっていうことですよ。

戸田 そうですね。すぐしつこく書いているなっていうところは、今どうにかしたいと私が思っている。だから半ば記録でもあり、半ば次の保育につないでいるみたいな、そういう今日から明日へとか、先週から今週へとか、先月から今月へってつなぐ際に、振り返りつつ次を見る、大事な場になっている。

つなぐことと個を大切にすること

浜口 戸田先生が大事にしているのは、それぞれの個がその個で固まらないでお互いにつながるともつと面白いということに気付くということでしょうか。

戸田 私はいつもつながらなくていいと思っっています。四歳の後半になると、友達と共に遊ぶ楽しさを味わうとか、その中で思いを伝え合うとか、

園の長期のねらいの中に入ることがある。そのような場合は、特に保育者は子ども同士をつなげたくなくっちゃうんですよ。だけど、人と人とのつながりってとても難しく、一人ひとりがきちつと自己を育てていけないと、馴れ合う形も生まれるんです。

これは、保育者が計画よりも、デザインをしたと思う例です。ある園に、リーダーの子Aと、その子にいつも付き従って遊んで楽しんでる子Bがいたんです。仲間として遊んでいたけれども、Bがある時、すごく面白いアイデアを思いついて一人でやろうとした。すると、今まで一緒に遊んでいた子どもたちは、楽しそうなBのアイデアにちょっと乗りながら、いつの間にか乗っ取って自分たちの思いで遊びを動かしていくんですね。そうするとBのもともと持っていたアイデアは実現しない。でも仲間関係がもともとあるので、一見楽しそうには遊ぶんです。でもこの保育者は、Bの思いが中途半端に壊されてしまっていることに気付きました。Bのアイデアが面白くても、Aはリーダーでいただけであるため、

遊びが続かないと見極めるのです。そのような時に、あえて、「B君は一人で何か面白いことやりたいみたいだよ」と伝えたり、「二人でもやってみたら……」



▲戸田雅美氏

ってBを励ましたりするようなことがある。

浜口 あえてつながりを切ることもある。

戸田 そういう入り方が、期のねらいを無視してでも必要だなんて思う時があります。私は別にいつもつながりとか絆とかにあまり強くこだわる必要はないと思っていて、むしろどこかでダウトをかけながら、個というものが確立する方向と絆を結ぶ方向とこの二つはいつも見極めながらいかないといいけません。保育の場ではよく「仲良く」といいますよね。子どもも一緒にいるとにぎわうので、楽しくなることが多いんですね。でも自分自身が思っていたことに、個として向き合う勇気みたいなものも経験させてあげたい。そのことが、結果的に、絆に生きてくる。個々が力を持って絆を結ぶと、集団が



また大きく変わっていくので。その辺の見取りがすごく大事だし、難しいなって思うんですね。

個の力はステップで伸びるわけではない

戸田 個の力に目を向けると、すごくシンプルに育ちがわかりやすいので、そういうことを求め過ぎる園もあるのはどうでしょう。集団というのは、化学反応のように見えることがあります。ある子の始めたことを面白いと思つて刺激を受けた子どもが、同じにやつてみようと思つて思う。すると、同じことをやってくれたことに気付いた子どもがうれしくなつて変わってくる……みたいな。予想外の変化つていうのがある。それを考えると、計画を細かなステップで考えることはどうかと思います。

浜口 段階を踏んで育つという考え方ですね。

戸田 そうです。計画というものは、一段一段進めるのがあたりまえ、この子はこれができないから次はこれができるように、という強固な考え方です。このようにステップで計画を立てると、すごくシン

プルになります。例えば、友達にかかわろうとする時は、まず基本的な「ありがとう」「ごめんさい」とか、「入れて、いいよ」を言えるようにするとか。「それができないと次へはいけませんよね」と個々に応じて指導する。この子は言える。この子はまだ言えてない。この子はまだ途中、というように。

例えば先生が「表現ができないとだめだよ」つて言うのと、できるできないを中心として集団が構成されるようになる。これは、集団としてはとてもきつい状況になる。多分、震災などという状況下でそれをやったら皆生きていけないかもしれません。体育館に避難している時、平等に場所を分けたとしても、やつぱりこの人は歩くのが苦手だなんて、本人はそう言わないかもしれないけど、じゃあトイレに近い所にしてあげようとか、それからこの家族は赤ちゃんとがいるからおっぱいをやる時に陰ができる所を用意してあげようとかかしますね。それは多分表現して「私はこうです」つて言うてできたわけじゃないと思ふんですね。

浜口　そうですよね。察してね。

戸田　実は察してあげられる人だけが損しているわけではなくて、そういう集団ができると、その人もそれが何かの形で向けられて、「あなた、そんな人のことばかり気にしていて、自分が休んでないじゃないですか」みたいな。「ご家族の方は案外寂しい思いしているみたいだから、今日は皆のこといいから家族のところに戻ってあげなさい」とか。やっぱりそういう関係ができて、それによって支えられて、何とか一緒に生き延びることができると。それが絆っていうものなのかなと思うんですけど。

特別な配慮が必要な子どもと共に

戸田　ある幼稚園で、障害のある子がいる四歳児のクラスにいました。三月でしたが、お部屋にも入れず、ご飯も一緒に食べられず職員室で食べる。皆が集まっている時は、誰もいなくなった園庭を駆け回る。この子は園庭が好きという見方もできるんです。

けれども、同じ集団が五歳になった時、担任が替

わったんです。そして五月に見に行ったら、その子は部屋の中に居てご飯も一緒に食べているんですよ。しかも、声らしきものを発している。それを、周りの子がうれしそうに、「今さあ〇〇ちゃんさあ、▲▲とかって言ったんじゃない」って言うとき、ほかの子が「違ふよきつと」って勝手に話しているんですよ。

浜口　本人を前に。

戸田　皆で本人の言いたいであろうことをあれこれ推測して言い合っているんです。それがその子にとってもまんざらでもないんでしょうね、特に関心を示しているふうでもないけれど、でもそこに居るんです。すぐく心地よさそうに。これは何なんだろうって考えさせられました。その子の能力が一か月にしてアップしたとか、周囲が一月にして、つまり年中クラスだった時の三月から年長クラスの五月の間に変わったとはとても思えないんですよ。そこが集団というものの面白いところですね。

浜口　それぞれの担任の先生のデザインの仕方が違うっていうことですかね。



戸田 全然違いますね。四歳の時の担任はベテランの先生だった。五歳で新たに担任を持った先生は、障害を持った子どもたちと個別にかかわった経験がちょっとあったんですが、担任を持つのは初めての先生でした。四歳児の時の先生は、一人ひとりをきちんと育てなければという気持ちが強くて、あの子は園庭が好きだからと、その時点ではその子のやりたなことを認めている。しかし、いざ入れられるようになってほしいと強く思っているから、認めつつもステップアップできないことが嫌なわけです。入ってこないあの子のことが……多分気になってしまふ。

でも五歳児の先生は、担任を持たれた時に、子どもたちとその子の問題を上手に共有していったのだと思います。というのは、そのクラスでは、お片付けも、経験も浅い初めての担任なんで、とても時間がかかるんです。わやわやするだけでなかなか片付けが片付かない。でも、感心したのは、ほぼ片付け終わりがけたところのことです。その子はまだ相変わらず園庭を走り回っていました。すると先生が子ども

もたちに、もうそろそろお部屋は片付け終わりそうだから、片付けはみんなに任せて、先生はその子をお迎えに行ってもいいかと聞くんですよ、皆に。そうすると不思議なことに、急に、片付けが盛り上がるんです。「僕たち片付けとくから、先生は行って大丈夫」って。その会話を聞いただけで、その前のごたごたとか未熟さみたいなのが全部吹っ飛んだような感じがありました。つまりその子の問題は先生だけの問題ではなくなっていたことに気付かされました。よくその関係をつくったなことに関心しました。

浜口 それって、子どもから見ると先生を頼りなく思うのとは全然違うんでしょうね。

戸田 多分。先生が何を思って今どこで大変そうかかってことに気付いた途端に、自分たちはここは頑張らねばって言う、まあ五歳になってたっていうものもあると思うんですけど、思いが生まれたのでしょうか。

保育者の表現としての計画

浜口 戸田先生は、デザインをするとか、計画を立て

てるっていうのは保育者の表現なんだとも言われています。保育者の主体性というか、結局それが計画とかデザインに表れてくるっていうことですか。

戸田 気持ちの中にあるから何も出さないでいいという考えもあると思うんです。けれども、何かの形で、たいていは書くという方法ですが、表現することとは、自分自身に返ることでもあると思うのです。そうすると自分が実はどういうことを大事に思っているんだらうということがわかる。例えば園長先生と小さいことでぶつかるけど、言われていることも、よく考えてみると、自分でも、今ではないけれども、もう少し先であればできたらいいなと思っていることに気付くとか。そうなると、どうして、今ではだめだと思ふのだからと考え始める。

浜口 客観的に自分が見えてくる。

戸田 今自分が子どもをどうとらえているのかということが見えてくる。それは、記録であって、同時に計画でもある。おそらく、その両方をつなぐ中間的な存在が指導計画なのでしょう。だから、一般的

な「計画」という言葉では誤解を生みやすい。

それを表現として残して積み上げることで、子どもの育ちだけではなく、保育者としての自分の育ちも表現されて見えてくる。この意味では表現することとはすごく大事なことだろうなって。表現しないしていると、日常に追われているうちに飛んでいっちゃうっていうか。それは自分が見えない状態。自分が見えないと思わないままどんどん過ぎていくことだし、子どもが見えないのに、子どもが見えないことに気付かないまま過ぎていくことになるのなかって思う。だから面倒くさいけど、デザインをし、それを表現する。それが「指導計画」を書くっていうことだと思っんです。

浜口 今日はありがとうございます。



(二〇一二年十月十二日)

私はこう
考える

カリキュラムは
だれが作る？

保育者の「表現」としての計画

矢萩恭子

(田園調布学園大学)

保育の経験を記録することから生まれる

以前勤めていた幼稚園で教育課程の見直しに取り組んだ際、保育記録を書く行為が急に楽しく思えたことを思い出す。普段は、週や月の振り返りや打ち合わせを行う時以外は個人で行っていた記録だったが、その時は、仲間と共に、子どもたちの園での遊びや生活を見直す作業がある期間集中して行った。一日の長い時間を共に過ごす同僚たちと、子どもたちの姿についてじっくりと話し合える時間は貴重であった。また、一年前、二年前の子どもたちの姿に

まで話が及び、子どもの実態から浮かび上がる、発達する姿の不思議を改めて実感させられ、一喜一憂したことは今さらながら楽しい思い出である。

その時に初めて、記録することと計画すること、自分自身の保育とその園の保育とが自分の中でつながったように感じた。一つひとつの保育の中身に關して、なぜこのような環境や遊びを用意するのか、どこからこの時期のこのねらいや内容が生まれてきたのか、なぜこの時期にこのような行事を行うのか……。それらが発達の理論や先輩保育者たちの長年の経験の踏襲ありきでつくられるのではなく、実際

矢萩恭子 (やほぎやすこ)

田園調布学園大学子ども未来学部子ども未来学科准教授。

『保育者論—共生へのまなざし』(同文書院、共著)ほか。子ども自身の発達の体

の子どもの姿に向き合う先輩保育者たちの、子どもや子どもの育ちへの理解や願いが積み重なる中から生まれ、つながってきたことに思い至ることができたのであった。そこに、自分たちの保育に向き合う保育者たちの理解や願いを新たに「表現」して入れ込みながら、今ここの保育の形を探していく。

すべて、もとになっているのは、保育者それぞれの子どもとの出会いであり、子どもや保育に向き合う姿勢である。そうした小さな経験を地道に言葉に表現するところから計画が生まれ、子どもの育ちが紡がれていく。

学生の学びに寄り添う

保育者養成校の教員として、授業や実習指導を通じて、指導計画や指導案のことについて伝えていく機会が多くあるが、この一年半は特に「総合演習」というゼミ授業においてその方法を模索してきた。つまり、実際に二歳児保育室という形の保育実践の場を用意し、学生たちの実践力を育てることに取り

組んできたのである。開設や運営の詳細はさておき、ゼミ生たちの学びに寄り添いつつ、自らも模索してきたことから、その難しさを挙げてみる。

まず第一に、保育直後の反省会で、一人ひとりの子どものその日の姿を振り返りながら言葉にするこの難しさである。それは、何をしていたか、何があったかの断片からだけでは、なかなか見えてこない。そこにいた保育者自身の援助やかかわり、感じ方も含めて語られる時、ようやく生き生きと息づき始める。初めは教員が率先して語り、学生保育者が語りだせるようになる時を待つことが続いた。

次に、前の回の反省を活かして次回の援助のあり方や保育内容を具体的に構想することの難しさである。例えば、絵本を読む場面で、子どもたちが落ち着いて集まるようになるためにはどうしたらよいのかといったことである。子ども自身が経験することに対し、保育者自身が何を願い、どうあることを目指すのかというふうに考えるまでに苦心し、一人ひとりの子どもへの理解をもとに次回の環境設定や

保育内容を話し合うことに遅々とした時間を要することとなった。

そんな手探りが続く中、事態が変わり始めるきっかけは、やはり子どもたちの姿であった。三週間に一回程度の不定期な保育室に、それでも楽しみに通ってきてくれるという子どもの思いや、わが子の名前を呼んでもらえてうれしかったという保護者の方の直接の声が、出会いの喜びを実感させてくれたのである。書式を学生に任せて毎回作成することを求めた指導案も、義務感から空疎な内容が目立った初めのころに比べると、反省や経験を活かした内容に少しずつ変わり始めてきた。何よりも、子どもたちや保護者の方々の力を大いに得ながら協力して一つの保育の場をつくり上げる醍醐味を互いに味わえたことは、大きな収穫であった。

計画と記録の中間にある指導計画

対談を読んで、計画するということは保育者の表現であり、この保育者の表現としての計画を残して

積み上げることで子どもと保育者双方の育ちが見えてくるという最後の戸田先生の言葉が印象に残った。学生にも保育者の「表現としての計画」をぜひ実感してもらいたい。そのためにも、子どもたちの生き生きと遊ぶ姿や、保護者の毎週開催してほしいという希望に目をつぶりつつ、実践後の反省から次の保育を具体的に計画し、準備して次の実践を迎えるという保育のプロセスは欠かせないと感じている。今後も、語り合い、表現し合い、そして感じ、考える豊かな保育の場を、学生と共に目指していきたいと思う。



注 矢萩恭子「総合演習授業における二歳児保育室の実践

と課題「あそびば『ぼこあ』」の開設を通じて」

全国保育士養成協議会第五十一回研究大会二〇二二年九月

私はこう 考える

カリキュラムは
だれが作る？

だから保育は面白い！

新井理香

(公立幼稚園・千葉県習志野市)

グチャグチャの中に見つけたもの

「楽器遊びがグチャグチャです」

負のオーラ全開の経験の浅い年少組担任からお声が掛かった。指導計画なんぞをペラペラとめくり、「自分なりのイメージを広げ、表現することを楽しむ」という楽器遊びに関係のあるねらいや内容を確認し、いざ、保育室へ……。そこで見たものは、愛らしく、可笑しく、自由気ままに楽器を奏でている子どもたちと、額に汗をかきながら必死な形相で「じゃあ、おもちゃのチャチャチャに合わせて楽器を鳴

らしてみようねー」と叫んでいる担任の姿だった。失礼ながら、しばし様子を眺めさせてもらった。実に面白い。鈴を手にしたA児は自分なりに手の振りを縦に横に動かしながら音を試している。タンバリンのB児は手首のスナップを利かせ、気持ちよさそうに拍子打ちをしている。隣で、C児はカスタネットの構造に興味を持ったのか、指を挟んだり離したりして音の響きを楽しんでいる。D児は「ちよつとうるさい！」とさらにうるさい声で皆に訴えている。困り顔の担任を尻目に、私の中では、これから担任と子どもたちが共に気付き、重ね合う音の世界をつ

新井理香 (あらいりか)

公立幼稚園 (千葉県習志野市) 教頭。

日常の中にある子どもたちのちよつとうれしいエピソードを、保護者や先

くり出していくことへの期待が大きく膨らんでいく。そして担任に感謝する。「さあみんな、先生のまねをして打つよ。カスタネットはタン・タン・タン……間違っちゃダメよ」と通り一遍の指導をせず、こんなにもこれからの遊びの広がり期待できるグチャグチャの楽器遊びを子どもたちが経験できたことに。

とは言っても、担任の困る気持ちは二十余年担任をしてきた私は十分わかっているつもりである。自分なりの思いをちよっと担任に伝えてみた。

「まず、一人ひとりを見てごらん。グチャグチャに聞こえるのは、先生が一度に子どもたちの音を聞くとうとするからだよ。子ども一人ひとりにスポットを当てると、曲や楽器に子どもたちはそれぞれ向き合っているよ。Aちゃんは、鈴は縦にも横にも振ると音が鳴る。どんな音？ どっちがいい感じ？ っ。Bちゃんはテレビでかっこいい動きを見たのかもね。あのスナップの利かせ方は素晴らしい。Cちゃんはどうやったら音が出る？ ということを感じしているよ。Dちゃんの『うるさい』っていう言葉は、遊

び方に気付いていくための素晴らしい一言だね。こういう声をしていねいに拾っていきながら、『じゃあ、うるさくなくて気持ちよく感じるにはどうする？』ということに皆に投げかけていく中で、楽器を分けることや、音の組み合わせに気付いていけるといいね。どの楽器はどんな打ち方をしたらいい音になる？ 曲に合う？ っ。ことに気付いた子からほかの子へと少しずつ広がるといいね。それを受けてほかの子たちはどんな気付きをするかな？ どんな音が飛び出すのかな？ その中に、表現を楽しむっていうねらいのエキスがたっぷり詰まっているよ。まずは、子どもが何を楽しんでいるのか、何に気付いているのかを見つけることから始めてみようよ」と。

子どもの気付きをつなげていく

もちろん、保育者はただ子どもの気付きを面白がって見ていようというのではない。楽器という教材を通して、表現の仕方や音に気付き、自分なりに表現する喜びを感じてほしい。友達の音に気付けるよ

うになったなら、相手を受け入れ、対話するように音を出し合う楽しさにも気付いてほしいなど、願いを持って、そのためにどんな環境が有効かと考えながら子どもと向き合う。しかし、その願いを押し付け過ぎてしまうと、心地よい空間が崩壊してしまう。そのさじ加減が保育の醍醐味である。

子どもの気付きはどこにつながる？ どんな面白いこと、素晴らしいことになる？ 子ども自身は、どのつながりを求めている？……。保育者は、そう問いながら子どもと向き合い、次の手を打つ。それが日々の指導計画となる。そして、ちょっと離れた目線で小さな気付きを囲う大枠にも目を向けてみる。それが月や期の指導計画なのではないだろうか。そう考えると、カリキュラムを作るといえるのは、先生と子どもで気付きをつなげながら作り上げる至福の共同作業なのではないかと思う。

ある日の体験がその一年をつくることも

幼児の生活は、共通の感動体験からその後のさま

ざまな気付きを引き出し、遊びが広がることもある。保育者が意図した環境との出会いはもちろん、偶然の体験が大きなうねりとなることもある。年長組でのエピソードを一つ。

——クラスみんなで三十分ほどの散歩に出た時のこと。途中でまさかの雷。内心、雨が降ってきたらどうしよう、怖がったらどうしようかと私が一番焦っていたのだが……そんな時、クラスのムードメーカーEちゃんが「えーい！ 雷ドラゴン出てこい！ やっつけてやる！」と叫んだ。その一言で、雷は雷ドラゴンに変わり、不安な散歩は、雷ドラゴンをやっつける冒険に変わった。雷の音がするたびに「出たぞ！」ってみんなが面白がる。ちょっと強い風が吹いても、そこを歩き進むことが冒険みたいで何となく楽しい。♪雷ドラゴンをやっつけろ♪ オーオー！♪ と、即興の歌まで飛び出しながら無事幼稚園に到着。——

その時、クラスみんなで強烈に体験した雷との出会いは、生活に大きく影響した。次の日、雷ドラゴ



ンの絵を描き始めた子、掃除をしながら鼻歌で、雷ドラゴンの主題歌を歌う子。空を見上げ、雲の中にみんなが雷ドラゴンを探した。しばらくして、この体験をもとに物語が生まれ、ペープサートになったり、劇遊びになったりと発展した。また、卒園式の思い出では、声高らかに、「幼稚園で一番楽しかったことは、散歩で雷ドラゴンを見たことです」という声が数人から聞かれ、まさに雷ドラゴンを中心に回った一年であった。

雷ドラゴンとの出会いは、初めから指導計画に記されたことではない。この遊びを膨らませたことで、少々縮小させることになった計画もある。でも、雷ドラゴンとの出会いは、子どもたちの一年を豊かにし、クラスの絆を確かなものにした。それってちゃんと学級の目標や園の教育目標にも結び付いていたな……と後づけで思う。

だから保育は面白い！

楽器遊びと雷ドラゴン。共通するのは、保育者自

身がその体験、子どもたちの気付きや姿に面白さを感じることに。次はどんな展開が待っているのだろうか？ どんなきっかけがあれば、もっとワクワクするような展開になるのだろうか？ 誰のどんな気付きが、どうつながっていくのだろうか？ と考えて、保育に臨んでいること。

それを面白いと思えることがカリキュラム作りには欠かせないことなのではないだろうか。指導案や記録も同様。〜で遊ばせなくてはならない、こんな育ちに導かなくてはならないと肩に力を入れ過ぎず、今週の火種、台風の目ともいうべき面白いエピソード一つから始めればよい。そして、見事期待を裏切られた時、「ほほーっ。そう来ましたか……それなら、こんな展開はいかが？」と保育者自身がその姿の中に新たな気付きを見いだし、それを面白がり、また子どもたちと気付きをつないでいけばよい。

先生と子どもでつくり上げる生活。心地よい空間。だから保育は面白い！

私はこう 考^える

カリキュラムは
だれが作る？

おいしいカリキュラムのつくり方

辰巳 豊
(アート教育実践家)

ここでは、筆者が実践してきた小学校の図画工作科〔学習分野・アート〕^{注1}において、どのようにカリキュラム（題材開発）を作ってきたかを報告することとします。皆様がかかわっている幼児の教育活動にとつても何かのヒントになることを願っています。

小学校では伝統的に八つの教科が存在し、それぞれが個別に独立しているのが長い伝統です。近年は、子どもを全体的にとらえようと、その枠組みが緩やかにになり、総合的・横断的な取り組みも増えてはいますが、やはり自分の領分を意識し続けているのも変わらない事実です。

ここで、図画工作科の教科特性というものを考えてみます。ちよつと衝撃的な発言になりますが、その特性とは中味が無いことです。算数を学ぶことにより、計算技術を身につけたり量を感覚的に理解したり数理的な思考を發展させたりと、実利としてのスキル獲得ができます。国語の場合はどうでしょう。言葉の習得に始まり、文章構造の理解、書かれています内容の読み取りによる情緒的な感情の育成など、その後の生活にとつて確実に生きる糧になるものを獲得していきます。こういった直接的な収穫物が無いことが、図画工作科を取り組みにくい教科の一つ

辰巳 豊（たつみゆたか）

保育現場のアート教育と子どものデザイン教育の接点に興味があります。
造形教育センター第25代委員長。元お茶の水女子大学附属小学校教諭。

にしているのだと考えます。

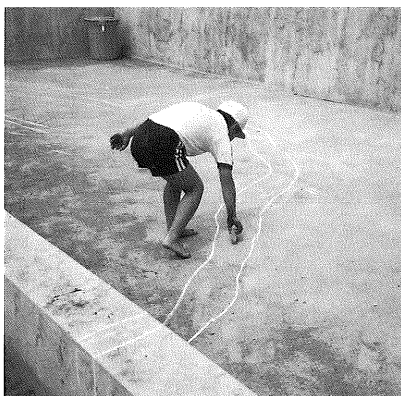


▲最後までおいしい図工

「今度の図工は何やるの？」期待を持って尋ねてくる子どもの純粹な質問に対して「お楽しみに」と明快な応答ができず、とつさに濁った答えをしてしまった経験は、熱心な図工教師ならば誰もが思い当たるはずです。その図工教師は決してさぼっているわけではありません。目の前にいる子どもの実態や生活をていねいに観察し、一番ヒットする題材を常に探し求めているからこそ、答えに窮するのです。教科内容が明確に示されていないことは一見マイナスイメージとしてとらえられるでしょう。しかし見方を変えれば、教えねばならない中味を意識するのではなく、楽しさや心地よさを味わい尽くすことが許されるのです。そう考えると、題材の可能性は無限ですし、

それがメリットにもなります。

もう少し具体的な例で考えてみましょう。写真はコンクリートの地面に道を描いて遊ぶ一年生の様子です（写真1）。彼は、どこかからか石を見つけてきました。そして自分がチョークで描いた道の上を走らせ始めました。ブーブーという走行音付きです。彼の身体、思考は一台の自動車になりきっています。



▲写真1 『自動車世界』に没頭する
(市川市立幸小学校1年生)

架空の世界の中での話ですが、彼は『自動車世界』にその時点で住んでいるのです。彼の欲する自己実現がなされていると言つていいでしょう。

次の写真です（写真2）。三年生が屋上で短冊状に切った新聞の折り込みチラシをつないでいます。風にそよぎ、長く延び、フェンスに結び付き……と紙はまるで生き物のようです。ここで子どもは何を考えてそういう行動をしているのでしょうか。



▲写真2 心地よい『ひらひら世界』
（目黒星美学園3年生）

設計図を思い描く暇はありません。それよりも前に身体が反応してしまうのです。ある日ある時、自分が生きているその場を楽しみ、心地よさを味わっているように思えます。いわば『ひらひら世界』を

楽しんでいるのです。

もう一つだけ写真を見てください（写真3）。四年生が階段を封鎖？ しています。垂木を組み合わせ、通りにくい道をつくっているのです（この上は屋上なので一時的に階段を占有させてもらいました）。



▲写真3 身を這わせる『くぐり抜け世界』
（お茶の水女子大学附属小学校4年生）

木と木で区切られた狭くて窮屈な世界が誕生しました。そこをくぐり抜けていくという行為は非日常の世界です。身がかがめ、ぶつからないように進んでいく行為に没頭します。そこを通り抜ける心地よ

さは、また格別で達成感があります。『くぐり抜け世界』にどっぷりと浸かっているのです。

さて、この三枚の写真が意味するものは何でしょうか。ここには、図画工作科が狙う根源的なねらいが現れているように思います。それは、心地よさの体感ではないでしょうか。心地よさといっても、三番目の例の『くぐり抜け世界』でもわかるように、それは必ずしも快適なものに限定しているのではなく、さまざまな現実をすべて受けとめた上での楽しさです。子どもにとつての今そこに生きていること、そのものなのです。

このように自分の生活を見つめ実感する。それも物という確かな存在物を通してからだ全体で感じること。これこそが一見、得体が知れなかったアートの核心なのです。美とか善とかを問う以前に、自分の人生で遭遇したものを受けとめ、実際に存在する物とかかわっていくこと。起こったことを苦と取るでもなく楽と思うでもなく、一つの出来事としてできるだけ純粹に感じ取ること。その行為を通して自

分の在り方を味わっていくこと。それが真のねらいであり、そこから本当の意味の学びが育まれていくのだと思います。

往々にして教師というものは、絵を描いたらこれ、工作をしたらあれ、といったように何かのスキルを身につけてほしいと願うものです。その呪縛から放たれて従前の指導観を捨て、もつと子どもの生の生活に素直に寄り添うことができたならば、どれだけ教師自身が図画工作科の授業を楽しく有意義に行うことができるのと思います。

注

1 お茶の水女子大学附属小学校では「教科・図画工作科」に代えて身体性を重視した「学習分野・アート」という呼称を平成14年度より使用している。教科は教師側からの働きかけを中心としていたが、学習分野は、子ども側からの学びを大切にしたいという願いが込められている。

2 「学習分野・アート」においては、心身一元論の精神を表すために、ひらがな文字を当てて、心を含むまるごとの存在と位置付けている。

屋敷林の中で自然いっぱいの暮らし

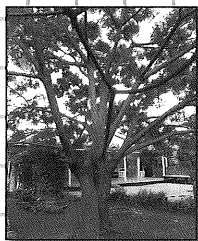
シリーズ
子どもが
育つ場所を
訪ねて



中瀬幼稚園(東京都杉並区)

日本全国にある「子どもが育つ場所」を幼稚園教員が訪問。自分の目で見て聞いて感じたことをレポートします。

第9回は東京都杉並区にある中瀬幼稚園。武蔵野の屋敷林をそのままにした園庭の中で、子どもたちがたくさんの命とふれ合いながら遊んでいます。



西武新宿線の井荻駅から線路に沿って商店街を少し歩き、曲がると、そこは一戸建てがゆつたり並ぶ閑静な住宅地。ふと目線を上げると、そんな住宅地にあるとは思えない、うっそうとした緑が目飛び込んできた。目指す中瀬幼稚園はあの屋敷林の中にあるに違いないと進むが、あまりの緑の深さに圧倒される。これはどこかの神社で、幼稚園は違う場所なのではと心配になりながら、深い緑に沿ってぐるっと回っていくと、やっと幼稚園の門が見えた。

門から見た園庭は、まるで自然を自然のままにしてあるキャンプ場のように思えた。朝の穏やかな光の中、園庭のそこそこで、アウトドアスタイルに身を包んで竹ぼうきを手に庭掃除をしているスタッフの姿も、その印象を強めた。みんな朝の仕事に余念がない。

程なく園の中に招き入れられた私たちは、園長の井口佳子先生から、「荷物を置いてスタッフと一緒に動いてください」と伝えられた。一日、お客様として過ごす気分だったことが場違いだったことを、

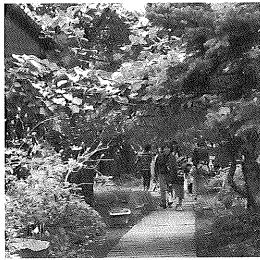
その時深く感じた。誰が訪問しても、仲間の一人として迎え入れて一緒に過ごしていくのが、ここではあたりまえなことなのであろう。

◆子どもたちの朝はゆっくり始まる

掃除が終わると、スタッフ全員が職員室に集まって、立ったまま打ち合わせが始まった。それぞれのクラスの子定が簡単に報告された。井口先生からは、岩手県の仮設住宅から届いたジャガイモをそろそろ食べたい旨が伝えられ、年長組はその日の計画を變更して、園庭の真ん中にある竈^{かまど}でジャガイモを調理して食べることになった。

保護者と子どもたちがちらほら門をくぐりだし、再びスタッフは持ち場に分散していった。

子どもたちが来る前は張り詰めた緊張感が感じられたが、子どもたちが園に足を踏み入れ始めてからは、一日、時間



はゆっくり流れていった。

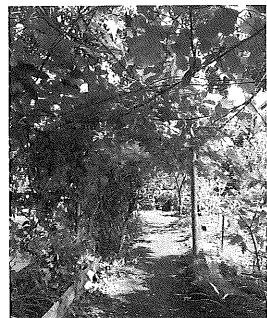
早々に荷物を置いて好きな遊びに出かける子どももいれば、リュックを背負ったまま、時間をかけて園庭の草花に朝のあいさつをして回っている

子どももいる。それぞれの子どもたち、親たちが、好きな道を通って自分たちのペースで、自分たちの思いで園の時間に気持ち切り替えていく。幼稚園の朝はゆっくり始まるのがいい！
改めて朝の時間の大切さを感じた。

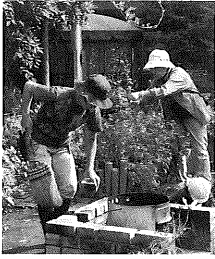
◆豊かな自然環境の力

そんなゆっくりした朝を生み出しているのは、思わず立ち止まりたくなる豊かな自然環境の力によるところが大きい。

その豊かな環境は、もともと屋敷林の一部としてあったものだ



思っていたら、「園庭を家庭の庭の延長に」という発想で、十五年前ぐらいから、遊べる植物、食べられる植物をさらに増やしていったということ。その当時は、園庭の真ん中に土の山を作ったり木を植えたりすることは受け入れられにくいことだったが、子どもたちに興味を持ってもらいたいものを真ん中に置くことを信念にして、変えてきたということである。今は、子どもたちが身近に暮らすといいたろうと考えられるありとあらゆる植物が植えられている。いろいろな芽が出ていること、花が咲いていること、実がなること、それを感じながら、立ち止まったり、気をつけて歩いたりしてほしいと考え、植物を囲う柵がない。



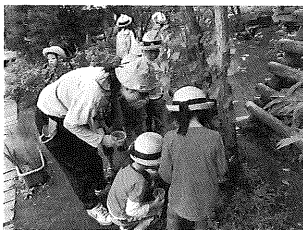
井口先生は、保育時間にごく自然に園庭の植物の手入れをしていらした。庭の真ん中で低い姿勢で作業をしていると、子どもの声がよく聞こえ、子どもの様子がよく見えるのだそうだ。日常的

に保護者にも庭の手入れを手伝ってもらっているように、この日も庭作業をしている保護者の姿が見受けられた。

「生き生きと大人たちが仕事をしていること、そういう人たちが園の中で過ごしているということが必要」という考え方が貫かれている。

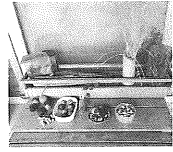
◆至るところに自然の恵み

大人が園の自然にかかわりながら作業をしている傍らで、子どもたちもごくごく自然に花を摘んだり、実を拾ったり、また、園庭に生息する虫や小さな生き物に興味を持ったりしていく。園庭のそこかしこに、しゃがみ



込む子どもの姿が見られた。そして、手には何かしら自然の恵みを持っているのだ。

園舎の中のいろいろな所に、さり



げなく草花や実が飾られているのも、子どもたちと自然の結び付きを強める働きかけをしている。

圧巻は、ベビーバス

にいっぱい集められたセミの抜け殻であった。仲間同士で考え合って、いろいろ工夫して数えた過程が見てとれる掲示、抜け殻の総数の掲示もあった。

見つけ、集め、試行錯誤して数える。ずっとずっと積み重ねられてきている豊かな自然と子どもたち、先生たちの共生の姿の結実をそこに見た思いがした。



▲数える工夫



クラスの活動がそれぞれ緩やかに始まっていった。広いウッドデッキの側にあるコンクリート敷きのスペースで、年少2クラスが絵の具の活動を始めた。大きな段ボール箱を開いたものに、思い思いの色で自由に描いていく。そのうち、担任は、自分の顔や洋服にも色づけするよう子どもたちをさりげなく促していき、子どもたちも自分たちの顔や足に描いたり、より開放的な活動になっていった。

年中の1クラスは、「竹の子村」と呼ばれている裏の竹林に出かけていった。



◆園生活の日常性

そして、年長組は、予定変更して取り組むことになったジャガイモをゆでる活動を始めた。竈まわりの清掃から始まって、きれいになったところで、年長児みんなで集まって、火の神にお祈りする儀式が始まった。それから火がつけられ、拾ってきた枯れ

◆各クラスの活動

朝の時間、ゆつくり思い思いの遊びをしたり、飼育物の世話をしたりして過ごして、十時ごろから、

枝が子どもたちによって、くべられていった。ゆで上がったジャガイモは、お弁当を食べ終わった年少児にも届けられ、クラス前のデッキでおいしそうに食べていた。届けられたおすそ分けを縁側で食べている日本の昔の「コマがふ」と思い出された。

頂き物が届いたり、収穫物があったりしたら、おいしい時期に調理して、ありがたくみんなで食べる、そういう日常性が大事にされているのである。

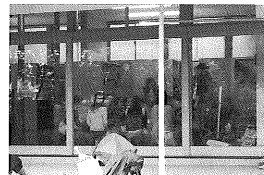
「第一次産業（農業、林業、漁業）を保育につなげていきたい」。保育後にお話を伺った時、井口先生は繰り返し、このことを強調された。生きることに直結する日常の作業に子どもたちを積極的に参加させることを目指しているのだと感じた。



◆親の活動

子どもたちがそれぞれの活動をしているころ、別棟では、有志の親が活動していた。この日は、園で長年使っているタオルの繕い作業をしていた。「夫もこの幼稚園出身なのですが、夫が園児だったころから大事に使われているタオルなんです」。一人の保護者が話してくれた。「モノは修理しながら大切に使う」という中瀬幼稚園の精神が保護者の中にも深く浸透していることを感じた。

保護者による被災地支援の活動も盛んな様子であった。岩手県宮古市田老の仮設住宅の方たちの「何か手仕事をして楽しみ、それが収入になればうれしい」という声から、刺し子のコースター作りを思いつき、材料や必要なものをそろえ、田老の方々に作ってもらう活動を進めている。そのつながりで、ジャガイモも送られてきている。



教師も、親も子どもも、今起こっていること、世の中のことと接点を持つことが大事と考え、井口先生をはじめ先生方自ら何度も被災地に足を運び、できる支援をしたり、行った時に映像を撮ってきて子どもたちに見せているという。何回も親向けの勉強会や映画会もしてきたということである。

◆子どもたちが始めるありのままの遊び

二〇〇九年の二月から三月にかけて中瀬幼稚園の子どもたちの姿を追ったドキュメンタリー映画がある。「風のなかで むしのいのちくさのいのちものいのち」という題のその映画を数年前に一度見たことがある。子ども目の視線で子どもの体験しているありのままを残したその映画は、「やりたいことを見つけて思う存分取り組む生活が、子ども時代には何よりも大切」だということを淡々と語っていた。実際に園を訪問して、身体を巧みに使って、思う存分やりたいことをしている子どもたちの姿を目の当たりにして、もう一度映画が見たくなった。

訪問者／石川・伊集院・小川・宮里

文／伊集院理子（本誌編集委員）

参考文献等

1 井口佳子 『幼児期を考える―ある園の生活より―』

相川書房 二〇〇四年

2 映画「風のなかで むしのいのちくさのいのちものいのち」

制作／グループ現代 二〇〇九年

*上映会用DVDの貸し出しもあります。

（問い合わせ先 中瀬幼稚園）



— 訪問メモ —

訪問時期：2012年10月

訪問場所：中瀬幼稚園

〔住所〕東京都杉並区下井草4-20-3

〔電話〕03-3395-3636

子どもを信じて

私が幼稚園に赴任して、今年、四度目の春を迎えました。一年目は四歳児の副担任、翌年は三歳児の担任をさせていただくことになりました。そしてその子どもたちと三年間、同じ時を過ごすこととなりました。

三年前の春、初めての担任、初めての三歳児ということで期待と緊張で胸がいっぱいの中、子どもたちとの園生活がスタートしました。四、五月があつたという間に過ぎ去り、子どもたちが少しずつ保護者から離れて遊べるようになっていく中で、いつころにお母さんの腕から離れようとしないうちがいました。

香田成美
(佐賀大学文化教育学部附属幼稚園)

本園では、子どもが保護者にそばにいてほしいという時には、できる限り園に残っていたいただき、子どもの要求につき合ってもらおうようにしています。この子(以下、A児)は母親との会話や遊びは楽しんでいましたが、私が話しかけるとすぐに母親の後ろに隠れていました。母親は多少の不安もお持ちだったはずですが、他の保護者が次々に帰っていくのを明るく見送って、A児のそばにずっと寄り添っていらっしやいました。それでも用事があってどうしても母親が帰らなければならぬ時は、私が泣き叫ぶA児を一日中抱いて、一緒にウサギにエサをやった

り、粘土や砂場で遊んだりしました。

そうするうちに母親といる時間と私といる時間が半々になっていきました。そしてある時、母親が「成美先生、Aをよろしくお願いします」と笑顔でA児を抱いて連れてこられたので、「はい。わかりました」と私も笑ってA児を受け取ると、A児はとてもうれしそうにニコニコと母親と別れることができました。その日から、毎朝、このやりとりをするようになってきました。それからは母親の代わりに私を慕ってくれるようになり、さらには私から離れて友達と一緒に遊べるようにもなりました。ただ、お弁当の時だけは、私が隣に行くまで、いくらおなかですいていようと、絶対に弁当箱を開こうとはしませんでした。毎日毎日A児の隣で食べるのは、誘ってくれるほかの子にも申し訳なく思い、時にほかの子と食べると、降園まで拗ねて黙ったまま保育室に入ってきてませんでした。そんなA児に、困ったなあと言いつつも、私を慕ってくれることがうれしくもありました。

相変わらずお弁当は一緒に食べていましたが、時がたつにつれ、A児はいろいろな友達とかかわって遊ぶようになり、どの子にも慕われる存在になっていました。

A児は実はとても活発で、友達のことをよく気遣う優しい子でした。なかなか友達とかわりが持てずにいたB児のこともよく気に掛け、声を掛けていました。誰とでも一緒にいられるわけではないB児でしたが、A児には特別な安心感を抱いていたように、二人でゆったり遊んだり、保育室の隅で私と三人でよくお弁当を食べたりしていました。

B児は少々神経質で頑固な一面を持った子どもでしたが、入園当初は何事もなく楽しそうに園生活を送っていました。しかし周りの友達関係が出来始めると、取り残されたような気持ちが生じたのか、「自分でできないこと」に敏感になり、できないことに直面するとかんしゃくを起すようになりました。

特に、「上手にお弁当を食べられない」「友達に見られたくない」と言つて、クラスで一緒にお弁当を食べることを拒むようになりました。

本園のお弁当の時間は、保育者が援助しながら自分たちで机を並べ、好きな所に椅子を持っていつて座ります。その日、仲良く遊んだ友達と誘い合つて一緒に食べることも多く、なかなか決まらなかつたりいざこざがあつたりと一苦労しながら、やつこの思いでお弁当を食べます。友達と誘い合つてというところに、B児がお弁当の時間を嫌がる原因があつたのかもしれない。けれども、その一苦労を私たちは大事にして、B児にもその山を乗り越えてほしいと願つていました。しかしB児は、保育室にみんなが集まるお弁当や降園時、園行事の際には目に涙をいっばいためて固まつていたり、奇声を上げて泣いたりするようになりました。B児の辛そうな姿に私も胸が締め付けられる思ひでした。どうしてあげればよいのか……と悩むばかりでしたが、そんな時、「保育者が子どもをどうにかしてあげようなんてお

こがましい」という副園長の言葉を思い出しました。私たちが何とかしようとしなくても、私たちが子どもをしつかり理解し寄り添つていけば、子どもは自分でそれを乗り越えていく力を持つているということです。副園長はいつでも「大丈夫よ」と温かく私や子どもたちを見守つてくださつています。私には周りの先生方の大きな支えがあることを改めて感じ、安心してもう一度保育に向かうことができました。

B児がみんなと食べたくなければ、別の所で食べようと誘つてみることにしました。床で食べたり、おままごとコーナーで食べたり、テラスだったりしました。秋が過ぎ、冬が過ぎてまた春が訪れようとするころ、ホールに出したB児の大好きなお雛様の前に座つて食べることがありました。何日かそれが続くと、B児をうらやましがると、結局長いホールで食べることになつてしまいました。みんなが食べることをB児が嫌がるのでは？と心配しましたが、B児と一緒に食べる仲間が増え

たことを喜んでいました。B児の一步成長に私も喜びつつ、このまま毎日ホールで食べるわけにもいかないと考えていたところ、ちょうど保育室でレストランごっこが盛り上がったので、お弁当の時間も「もも組レストラン」としてご飯を食べることにしました。B児も喜んでシエフになりきり、参加しました。絶対に皆とは食べないと拒んでいたB児も、ホールでの食事やレストランごっこを通して、友達と一緒に食べる喜びや楽しさを感じることができたようです。

このような形で三歳を修了し、B児は四歳に進級しました。新入園児も加わったの新しい環境でしたが、三歳での出来事は何もなかったかのように、保育室に入ってお弁当を食べ、二学期には友達の輪の中に積極的に入ってお弁当の時間を楽しむようになりました。一方のA児も、友達が「先生食べられない」と甘えているのを見て、「Aちゃんもね、もも組の時はね、お弁当全然食べなかったけどね、今は

ちゃんと食べられるんだよ」と得意気に言い、あつという間にお弁当を食べ終わって遊びに行きます。

このような子どもたちの成長を通して、私に必要なことは、やはり子どもたちを信じて、あるがままの姿をしつかり受けとめ、支えることなのだと認識しました。また、鯨岡峻先生の『保育・主体として育てる営み』（ミネルヴァ書房 二〇一〇年）の中にも「子どもはいまのあるがまま（『ある』）をしつかり受け止めてもらえれば、その喜びと自信を背景に、必ずやその『ある』を乗り越えて、目の前の大人のように『なる』ことへ自ら向かいます。」とあります。私はこの言葉を胸に、子どもたちが安心感や信頼感を持って主体的に物事に取り組んでいけるような保育ができたらと思います。子どもたちにとって、かけがえのない幼稚園生活になるように、一緒に笑って時には泣いて、残りの一年間を大切に過ごしたいと思えます。

児童館の親子と共に

江村綾野

(お茶の水女子大学大学院博士後期課程・保育士)

はじめに

駅前のロータリーから数分歩くと、目の前に高層マンションが幾つも現れ、運河にかかる橋を渡った途端に風が強くなります。数年前から私がかかわっている児童館は、都内湾岸部の新しい街の一角にあります。

今回、『幼児の教育』の編集者の方から「私の保育ノート」に実践報告をというご依頼をいただきました。この機会に手元のノートから、子どもたちやお父さん、お母さんたちとの日々をご紹介しますと思

児童館のある一日

います。

九時三〇分開館。エレベーターの扉が開くと、けんちゃんとお母さんの姿が現れました。けんちゃん親子はすぐ近くの超高層マンションに住んでいて、お姉ちゃんのまゆちゃんは近くの幼稚園に通っています。まゆちゃんを幼稚園に送っていった帰りに児童館で遊ぶのがけんちゃんのマイブームだと、お母さんが話してくれました。お姉ちゃんのまゆちゃんも、一歳前から毎日のようにお弁当を持って児童館

にやって来ていました。まゆちゃんは、午前中、子育て支援室や体育室でめいっぱい遊んだら、早めにお弁当を食べて、そしたら眠くなって、ベビーカーに乗せられたと思っただけで寝て、私たちはうとうとするまゆちゃんを「おやすみ」と送り出すこともよくありました。お母さんが「幼稚園どうしようかな」と悩んでいた時は、「三歳児入園は定員が少なくて難しいかもしれないけれど、だめもとで願書出してみれば?」「幼稚園はいいところよ。子どもはすぐに慣れるけど、お母さんは慣れるのにちょっと時間がかかるかもね」などの相談が続いた日もありました。

十時三〇分。身長と体重の計測が始まります。一番乗りは生後二か月の赤ちゃんとお母さんでした。出産後初めて一人で赤ちゃんを連れて外出したことや、新生児訪問の助産師さんに勧められて来たことを明るく話してくれました。私は「いつでもふらつと遊びに来てくださいね。お母さんの実家はどこ?

パパは手伝ってくれてる?」と、おせっかいな近所のおばさんモード全開で話しかけてしまいました。

十二時。ラウンジでは赤ちゃん連れのお母さんたちのランチが始まりました。その隣のテーブルでは、歌声会の高齢者の皆さんがお茶を飲んでいました。七十代の前田さんは折り紙が得意です。バッグに忍ばせた紙ふうせんを隣のテーブルの子どもに手渡しています。お母さんは少し恐縮した様子でしたが、その紙ふうせんが前田さんと親子をつなげてくれたようでした。

一時。子育て支援室では八か月のゆうちゃんがお母さんと遊んでいました。ゆうちゃんは、はいはいでどこにでも行けるようになって得意そうです。隣で遊んでいた十か月のこうちゃんのおもちゃに手を伸ばすたびに、ゆうちゃんのお母さんはゆうちゃんを「だめだめ」と叱っていました。私が、「どちらからいらっしやいましたか?」と声を掛けると、いつもは家の近所の児童館に行くけれど、今日は足を伸

ばしてこの児童館にやって来たとのことでした。しばらくすると、ゆうちゃんとうちちゃんのお母さん同士で話が始まり、二人のお母さんたちはアドレスを交換したあと、一緒に帰っていきました。

二時三〇分。幼稚園帰りの子どもたちとお母さんたちがにぎやかに登場。持ってきたおやつを食べたあと、子どもたちはプラホーミング（柔らかくて大きい積み木）の部屋に一目散に向かい、その近くでお母さんたちはおしゃべりに夢中です。

三時。学童保育の小学生が帰ってくる時間です。館内は一気に喧騒に包まれます。子どもたちは学童保育室で宿題をして、おやつを食べて、その後は館内の好きな場所で好きな時間を過ごすことができます。コマ・けん玉・メンコ・ボードゲーム・カードゲームなどで遊ぶ子ども、漫画や本を読む子ども、図工室で工作をしたり、体育室でドッジボールをしている子どももいます。しばらくすると家にランドセルを置いた子どもたちもやって来ます。小学生パワーで館内の温度が一気に上昇するものこの時間帯

です。友達関係がうまくいかないこと、勉強がわからないことなど小学生ならではの悩みを聞くこともよくあります。小学生だからこそ、親でもない先生でもない大人の心のはしごが必要なのでしょう。

六時ごろから部活帰りの中高生たちの姿が見られます。彼らは、年の近い若い若い職員を頼りにしたり、一緒にいることでほっとすることがあるように思います。そして午後八時、児童館の一日が終わります。

児童館の子育て支援

全国に多くの児童館がつけられたのは昭和四十年代です。しかし、近年は児童館の役割や機能は大きく変化し、乳幼児から十八歳までの子どもたちの育ちと子育てを支援する施設として進化しました。

今回ご紹介した児童館の特徴は、遊びと子育て支援を縦軸に、乳幼児期から青年期までの子ども達の支援を横軸にしながら、地域の高齢者の方々との世代間の交流が第三軸にあることです。そして、子ども・親・祖父母の三つの世代がそれぞれの時間と

空間を大切にしながら、かつ交流するためのさまざまな活動が行われています。例えば、毎月のお誕生会は三世代合同のお誕生会です。その月に誕生日を迎えた子どもたちを、お母さんやお父さんと高齢者の方々が囲んでお祝いをします。児童館の活動の一つひとつが、子どもと親世代だけでなく祖父母世代も巻き込んでいこうと考えています。

地域のプラットホームとして

子どもたちは地域に守られて育ちます。しかし、そもそも東京の真ん中で暮らす人々にとって地域とは何なのでしょう。児童館の仕事の中で見えることの一つは、保育者はそこに住む人々と共にあることで保育者も地域の一員になっていくということだと感じています。

児童館には地域の子どもたちが集います。保育者にとっては、子どもの育ちを長期的に見ることのできる場所でもあります。また、子どもたちの入園・

入学などの節目をうかがうこともできます。保育者が子どもたちの発達を俯瞰しつつ、家庭支援の視点からかわっていくことは、大きな課題と言えるでしょう。さらに保育者には、世代間交流の場面では祖父母世代の方々と子どもたちをつなげていくという役割も期待されています。

乳幼児を育てる親にとっては、保育所や幼稚園と同様に児童館も地域のプラットホームではないでしょうか。児童館で働く保育者の一人として、子どもたちを中心にして、同時に子どもたちの周囲にある人々の支援にも取り組んでいきたいと思えます。

注 本稿では幾つかの事例を再構成しました。本文中に登場する人物名はすべて仮名です。

児童館は、児童センターという呼称を用いている地域もあります。

子どもたちの「現在」を考える①

孤立した「現在」と持続する「現在」

本田和子

(児童学者)

はじめに

いま、子どもの周囲に立ちこめる暗雲を、「未来を実体化できないこと」に基因するととらえた識者があった。確かに、未来へと流れる時間を真のものとして実体化できないとき、子どもは、暗い無気力に支配されるか、あるいは、自己中心的な「現在」の豊かさを願うしか、すべがないのかもしれない。

そして、その空しさは、子どもとかわりを持つ人々にとって、一入ひとしおのものとならざるを得まい。なぜなら、子どもたちは「現在を生きる人」にほかならないから、「現在を豊かに生きてほしいと願いつつ、しかし、彼らの長い余命が、行方の見えない「未来」に展開されるものであることも熟知しているからである。ゴールの見えないレースを、共に走り続けているような空しさ、ということも可能だろうか。

本田和子 (ほんだますこ)

児童学者。お茶の水女子大学前学長、名誉教授。
『異文化としての子ども』『子ども 100 年のエッセイ』
『それでも子どもは減っていく』など著書多数。

子どもと大人の余命

子どもと大人を隔てる最大の壁の一つが、「余命の長短」にあるとされる。たとえば、現在の社会の中心的担い手を四十歳前後の大人と仮定すれば、彼らの「余命」は四十〜四五年ということになる。ところで、いま五歳の子どものそれは、八十〜八五年ということになって、おおよそ二倍の長さを誇る。子どもは、四十年先の社会に関しては、辛うじて予測することができるとして、八十年先の社会のあり方を、想像する力に乏しい。子どもたちの生きねばならない社会を、見定める視力を持たないのである。

とは言え、子どもたちが自身に先への展望を求めることは無理に過ぎる。その責は、親や教師など、育む者の肩に担わされているのである。しかも、それを、「テクノ社会への適応」とか、「高齢社会の担い手」などという現体制の要求する未来像としてではなく、いま眼前に生きて動いている幼い彼らに即して、彼らの「未来に生きてある姿」を想い描くことは極めて困難であろう。ゴールの見えないレースの空しさは、そこに基因する。「こんな時代に子どもを産みたくない」という若い男女の呟きも、同じ根から発生していると言えよう。

改めて、「子どもの時間」を考える

いまさららしくと鼻白むことを止めて、「子どもたちの時間」について想いを潜めてみよう。子どもとは、「未来のため」ではなく、「現在の時間」に輝きを見せる存在であるとは、繰り返し唱えられてきている。とかく将来の準備期間とみなされがちだった子ども時代を、独自

の価値においてとらえ返そうとしたこの指摘は誤ちではない。「子ども期の独自の輝きの発見」とは、二〇世紀の「子ども中心主義」による最大の功績の一つと言えよう。

しかし、子どもたちの「現在」は、孤立した「瞬間」ではあり得ない。ヘーゲルとキェルケゴールとの、あるいはベルグソンとバシュユールなど、碩学たちの時間論争を振り返るまでもないだろう。彼らの「現在」は、孤独な点ではなく、幅も長さもある「展開せるいま」と言うべきではないか。

卑近な例を挙げてみよう。子どもたちが、「絵本」のあるページ、あるいは「テレビ」のある画面に熱中するとき、彼らは、そのページによって、あるいはその画面によって出現させられた「現在」に滞在している。彼らの視界を占領するのは、「いま、展開されているその世界のこと」だけ……。しかし、子どもたちは、そのページや画面が前のページや画面からの連続であることを知っているし、次にめくられるページや画面が、「新しい現在」を出現させ、そこに自分たちを滞在させるであろうことを予知している。

子どもは忘れてはならない。子どもたちの「現在を生きる姿」に感動し、それを大切にするとすることが、彼らの生を「細切れでとらえること」と同義ではないということ……。 「現在」に没入する彼らのありようは、その中に、「過去」と「未来」を含み持つ、「展開せる生の様相」にほかならないのだから。

子どもたちは「過去」を持っている




幼い子どもにも「過去」がある。三歳児には二年数か月の、四歳児には三年数か月の、一

人ひとり異なった生の過程が、彼らの後に積み重なっているのである。それらの年月は、子どもたち一人ひとりで互いに異なるし、また、彼らを支える大人たち、たとえば親や教師とも、あるいは評論家や為政者のそれらとも、大幅な隔たりを示すのではないか。とりわけ、現代のように変化の激しい社会にあつては、安定した社会のそれらに比して、より一層の隔たりを見せることは自明であらう。

私どもは、自身の「過去」を想起し、その功罪を論じることができない。しかし、それらは、いま「子どもである人」に適用することはできない。それに、彼ら一人ひとりの「過去」を、適確に想定することなど出来はしないのである。

ただし、彼ら一人ひとりの過ぎた時間の中の経験を掘り起こすことは不可能であつても、それらは彼らの「現在」に包み込まれている。子どもの時間が「現在」にのみ比重のかけられるものであり、その「現在」が過去と未来を含み持つ「展開せるいま」であるとすれば、彼ら一人ひとりの過去は、彼らの「現在」の中に顕現する。彼らの「現在」ときめ細かにつき合うことで、かけがえのない、そして抜き差しならぬ、「過去」の体現者である彼らとその「過去」を、受け入れることが可能となるのである。

「一人ひとりときめ細かにつき合う」とは、幼児保育界の鉄則であり、半世紀を超えて繰り返されてきた主張である。従つて、現代の危機に対応するものとして、こと新しく叫ばれるべき原理とも思われない。しかし、子どもたちの「いま生きつつある」時間をとらえ返すとき、まずこつとした基本的な原則が浮かび上がってくるこの意味に鈍くあつてはなるまいと思ふ。

食べる 
つながる 
育つ 

保育園給食から（後）

— 親たちの学び

兼田祐子

（朱い実保育園）

未知の世界に突入する親たちと子育てをしていくために

（本稿前編では、保育園の離乳食、給食について私が模索してきた過程について書いてきました。）

その当時、離乳食でいろんな素材の味を経験させるほうがよいということが言われていて、わざわざネギやシイタケを離乳食の食材に使うことをしている保育園の給食があったことを覚えています。この時期にいろんなものを食べなかつたらその後の味覚に悪い影響を及ぼすというような研究をそのまま受け取ったようです。子どもたちによかれという発想からでしょう。確かに離乳期が冬で、その時期にスイカを食べなかつたら一歳児になって初めてスイカを経験することになるので、初めてのものに警戒をし、食べ慣れたものを好む一歳児は、飛びつきはしないものです。そこにこそ離乳食の意味があります。

食事をしながら「自分の周りの人が食べているものは安心して食べていいんだな」という感

兼田祐子（かねだゆうこ）

京都大学の一角で親たちによる共同保育から始まった朱い実保育園の園長先生。いつも元気と肯定感にあふれている。長年、同園で栄養士として子どもたちの給食を切り盛りしていたが、2010年より現職。

覚が育っていきます。これは野生の動物から学びました。懇談会でお母さんたちにそのことを話すと妙に納得してもらえました。きつと自然界の摂理が納得を生んだのでしょうか。食べることうれしい、待ち遠しい。食べてほしいものがその時は食べられなくていい。それが食卓にあり、食べてみたいと思つた時に食べられる環境がつくれるようになっておくといいな話してきました。「いつか食べられるようになるというスタンスで臨むといいよ、保育園でも子どもたちには食べなくても見るだけ、なめるだけという猥褻もあるんだよ」と。

家と違って保育園のいいところは、作る人と食べさせる人が違うこと。自分の経験を照らしてみても、家だと、せっかく苦勞して作つたのに子どもが食べないと、自分の苦勞が無駄になつたと、どうしてもマイナスに受け取つてしまいます。保育園では、「今日はあかんあ。食べたくないのかなあ。この感触が嫌なんかもしれないなあ」と、あつさりと受けとめることができず。「食べないこと」で親が自分を否定されたと思わずに済むことも、「今日食べないこと」をおおらかに受けとめられる良さでもあります。

「どうしたら早く作れるの?」「どんな作り方なの?」という親の要望にこたえて、離乳食の調理実習を家の圧力鍋を持ってきてもらつてやってみることもあります。自分の生活の中で実現できる一歩をどうやったら見つけてもらえるか。「だしがおいしかった」。それだけでやってみようと思える保護者もいます。

誰にでもある「初めてのいこと」から学びが生まれる

私自身は二〇一〇年から保育園を運営していく職務に替わりました。離乳食やアレルギー食

を通して保護者や子どものことをおしなべて知っているから何とかなるだろうという、今から思えばびっくりするぐらいの肯定感で園長業務を承諾してしまいました。

今、私たちの保育園では中堅栄養士一人と管理栄養士の資格を取得した二名の若い職員が今までの献立をもとに計画を立て、献立の中に活かして、毎日の給食作り・食にかかわる活動をしています。数年前、彼女たちもまだ学生だったころ、管理栄養士の卵として給食の実習に来た学生さんから「トウモロコシの皮を初めてむきました」と言われた時にはびっくり。「ズイキって何ですか」「セリを使うのも初めてです」という若い世代が献立を考え、食に係る計画を立てています。

しかしながら自分に置き換えてみると「イナゴの佃煮を作ったことはないし、沖繩のヘチマ料理はしたことないなあ」と、誰でもあることだと気付きます。食材を選択し、調理していくということは、その土地への理解とそれまでに経験してきたことが大きくかかわってきます。九州から京都に出てきた私も、京都の調理師さんと仕事をする時に、切干大根の炊き方やちらしずしの作り方で「違うなあ」と感じました。献立を立てる役割は私でしたが、作る時の主役は調理師さんでした。彼女は年齢も調理技術も味付けも私よりずっと上でした。栄養摂取に軸足を置いた献立の時には、「何かこの取り合わせ、おかしいで」と鋭い突っ込み。「食べんかつたら何にもならんやん」「確かに」……。そんな時期を経ながら、今生活している所で確かなものを一緒に作り出し、アンテナを張って、つたなくもその裏付けをしてみた食へのアプローチでした。

学びは生活の中にある

私には近年言われるようになった「食育」という言葉が何やら耳障りに響くのです。身にまといにくいスーツを着せられているような感じですか。「子どもたちの生活の場に自然を開示すること」に共感し、「園庭が心の原風景となる」ように（第一二巻春・夏号の本連載、倉田新氏の文章から）、おつゆや煮物のだしをとるそのいいにおいを子どもたちの嗅覚の原点として残したいのです。毎日の繰り返し返される暮らしの中に期待と安心と興味がそそられることがあることを大事にしていきたいのです。次の世代の人たちも自分自身の発見と興味を子どもたちにも伝える努力をしています。

今日も、「おやつの後、明日の枝豆を枝から外してくれる？」とお手伝いを呼びかけようと、わざわざ枝付き枝豆を八百屋さんに持ってきてもらっています。給食室の横では年長さんが大豆を植えています。枝豆で食べるのかな？ 大豆にするのかな？ と私は興味津々です。

親たちの生活も、赤ちゃんがいる生活と自分の仕事との兼ね合い、連れ合いとの関係など思うように進まないことばかりです。朝夕の保育者・他の保護者とのちよつとした話や、クラス全員が書き込める毎日一枚の日誌。そこで食事のことや夜中の母乳の回数など、ほかの人のも見ることができ、親同士で共感したり、「どうしてるの？」と聞いてみたりできる関係をつくっています。お昼休みに授乳に来られる人は、保育園の昼間の生活を知り、働くことと子育てについての気持ちの落としどころを確かにしています。

子ども学探訪

編輯顧問
倉橋惣三
と
キンダーブック

⑤

生活と知を結ぶ芸術性

浜口順子
(お茶の水女子大学大学院)

「塩と砂糖の巻」(第三輯第十一編 一九三二(昭和六)年二月)

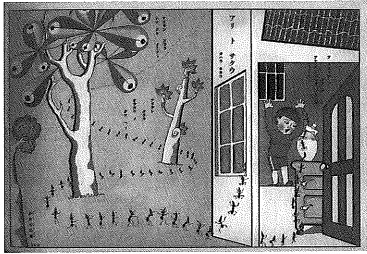
「おしお」と「おさとう」、見た目は似ているのに、片方はしょっぱくて、片方は甘い……
幼児期から子どもは、そんなことに気付き始めている。今から八十二年前、昭和の初め、キ

ンダーブックは「塩と砂糖」を特集した。解説のページの「序」には、
「……世界の人類生活の日常食物に、保健上に、はたまた化学工業の主
要原料等において、いかに文化生活上に貢献する所大きいか、日常、幼
児の最も親しみ、かつ好愛して嗜む食味の要素が、他面にいかに広大な
世界を有して利用活用せられつつあるか、逐次本編の頁を追い窺うこと
によって、層一層幼児の視野は拡大されるであろうと信じます。」とある。

表紙(画像1 絵は藤澤龍雄)には、牛と農夫が労作するサトウキビ
畑を背景にして、ちよっとお姉さんの女の子と、それより小さい男の子が



▲画像1 「塩と砂糖の巻」表紙



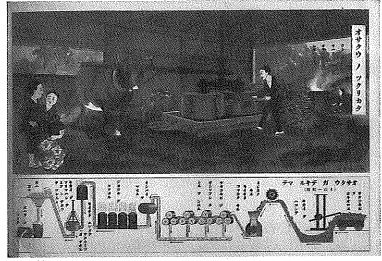
▲画像5 アリと砂糖 (武井武雄 画)

前半は「砂糖」の部で、その生産と製法と販売をテーマ(画像2、3、4)にして、社会的写実的な情報を中心にならしている。その一方で、砂糖を運ぶアリたちを童話的に描く武井武雄の絵(画像5)はリズムカルな表現でひとときわ楽しい。後半、「塩」の部に移るつなぎ部分に、塩と砂糖をなめた子ども生き生きとした表情を描く岡本帰一の絵(画像6)が

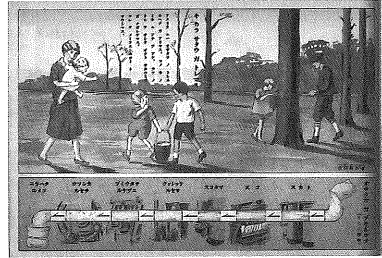


▲画像6 砂糖と塩 (岡本帰一 画)

刈取り・サトウキビの運搬／お砂糖の作り方・お砂糖ができるまで(その2)／サトウキビ売り屋／テンサイ畑／アリと砂糖／砂糖と塩／塩田・塩の作り方／暑い国の塩田・しょうゆの作り方／岩塩／デッドシー／清めの塩／上杉謙信と塩／まいだま。



▲画像2 お砂糖の作り方

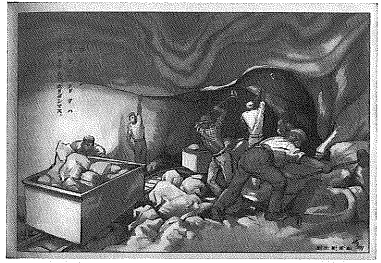


▲画像3 木から砂糖が採れます



▲画像4 サトウキビ売り屋

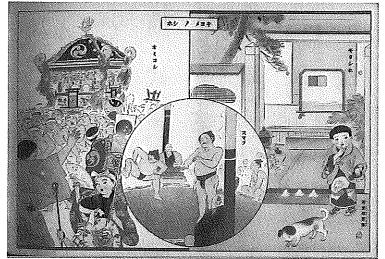
二人描かれている。解説には「甘藷」の原産地について、「我国でも台湾、小笠原、琉球に産し」とあり、改めてそういう時代だったのだと確認する。
内容(目次)は次のようである。耕作と植えつけ／



▲画像7 岩塩



▲画像8 デッドシー



▲画像9 清めの塩

あり、ほほ笑ましい。

「塩」の部は、砂糖の部より、内容がバラエティに富む。

生産・採掘（画像7）にかか

わる事柄のほかに、「シツマナ

イ カラ ダレ デモ オヨ

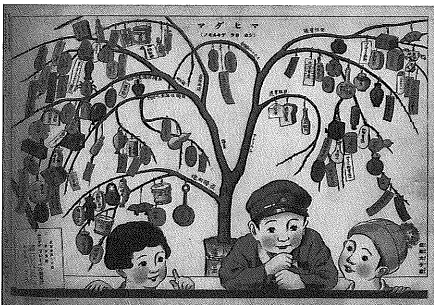
ゲル ノ ネ」と、ぶかぶか

と水面に浮かんでいる子どもが描かれた死海（英語でデッドシー）の図（画像8）、塩の文
 化的意味（お清め）を伝えるために「モリシホ（盛り塩）」「スマフ（相撲）」の塩、祭りで「オ
 ミコシ」にまかれる塩なども描かれる（画像9）。武田信玄が敵の上杉謙信に塩を送ったと
 いう逸話（画像10）は、歴史にからめて道徳性の涵養をねらいとしたと同



▲画像10 上杉謙信と塩

時に、塩がいかに生命の維持に必要なものであるか
 を知らせる好材料だとも考えられたものであろう。
 裏表紙部分の「マヒダマ」（画像11）は不思議な図
 だ。「食塩」という幹を持つ木が、ナトリウムと塩素
 と直接用途という枝に分かれ、さまざまな化学製品
 や食料品や日用品という枝に分かれ、さまざまなお
 かなり専門的な内容で、大人でもなかなか全部を理
 解しかねるだろう。しかし、宝物がひょうたんやお



▲画像11 まい玉

鍋、樽や小判、マッチや魚加工品などの具体物をイメージしたものになって繭玉にぶら下がっているのを見れば、塩というものが何やらいろいろと有用なものに作り替えられて利用されていることは、子どもにも直観されるだろうというねらいがあるに違いない。

附録 岡本帰一の絶筆

この号で異色なのは、急逝した岡本帰一の絶筆となった下絵と追悼文を、附録に掲載していることである(画像12)。「本誌の絵でおなじみ深い岡本帰一先生のおかくれ」とあり、岡本が絵筆を持つ横顔の写真も隅に載っている。岡本は、キンダーブックより早く一九二二年に創刊された『コドモノクニ』に多くの童画を描き、高い評価を得ていた。倉橋惣三はもともとコドモノクニの編集顧問でもあったので、その縁で同誌の絵画顧問であった岡本帰一のほか、武井武雄、清水良雄、初山滋らコドモノクニで活躍していた童画家たちの絵は、しばしばキンダーブックにも登場するのであろう。

書きかけの下絵が、しかも幼児向けの雑誌に掲載されることは尋常ではない。しかしそこに、倉橋の、岡本を惜しむ気持ちの強さがわかる。最期ぎりぎりまで子どもたちのために絵を描いた人がいたことを、倉橋は、読者に、特に子どもたちに伝えたかったのであろう。そこにはこんな文章が添えられている。「岡本先生は昭和五年も押しつまった二十九日午前六時、御病気のため、豊多摩病院でお亡くなりになりました。本誌御購読のみな様にはおなじみ深い、そし



▲画像12 附録

て名高い童画家として惜んでも惜んでも余りある先生でございました。ここに掲げた鉛筆下絵は、先生が本編のために、ここまでお描きになって亡くなられた絶筆、よいかたみの下図であります。図は我国砂糖きびの主産地台湾で、砂糖きびを賣う小父さんを取りまく台湾の子供たち、硬そうにきびを噛んでいる子供であります。台湾人のお家を背景に名物の水牛も見えます。見るからに懐かしみのある先生のお筆ではありませんか。」

絵雑誌と芸術性

武井武雄（画像5の作者）は「コドモノクニは非常に情操的で芸術的であった。子どものためにはそれだけでは足りない面もある。その足りない面を補うためにキンダーブックを始めた。コドモノクニに対して科学性をもった観察的なものを作る。必然的な意義があった。」と後年語っている。^{注1}大正十五年公布された幼稚園令で「観察」という保育項目が付加されたことを背景に、芸術性と同時に、^{注2}事物や事実の忠実な描写が求められるようになったことは、画家たちにとって新しい試練であったであろう。

倉橋は、幼児向けの絵雑誌が次々と作られるようになった大正期の初め、『日本幼年』という雑誌に自らかかわろうとしていたその時に、子どもだましの低廉安易な雑誌作りへの警告を発している。^{注2}「大人のものであるならば、万一多少の誤りや欠点などがあっても、読者の理解力によってその弊を免れることができますが、子供は理解力で弊を矯めることができませぬ。子供に於いては何ら重きを置くに足りないような局部的の誤謬も甚だしい弊害の基となります。この意味において、その相手とする子供の年齢が少なければ少ない程、編纂者は

戦々兢々たる綿密の心持を持つて居なければなりません。」

そしてさらに、絵雑誌の積極的意義に関して、芸術性の高いものを見せることの重要性を強調する。「元来子供に見せる絵は大人に見せる絵に比べて芸術的価値の甚だ低いものであると云う独断からして、これを軽んずる風がないでもありませんが、これも非常に誤りであります。」「子供に絵本を与えるのは、ただ字が読めないからと云う様な軽い意味のものではなくて、絵画それ自身の芸術的力によって幼年者相当の教育を与えようとするのにあります。更に他の言葉を以て云えば、絵を以て教授の用に供するばかりでなく、その情緒全体の上にも普遍的なかつ基礎的な教育を与えようとするものであります。」

この「塩と砂糖の巻」で岡本には二枚の絵が依頼されていたようである。その一枚は、この本の前半と後半をつなぐ「サタウト シオ（砂糖と塩の比較）」という表題のページ（画像6）で、女の子と男の子が、それぞれ砂糖と塩をなめた瞬間の顔の表情を描いたものだ。この号の全体の中で、最も子どもの生活に近いところで描かれている印象がある。「甘くておいしいわ」そっちのほうがいいなあ」というようなやりとりが聞こえてきそうではないか。

— 続く —

（引用文は一部、現代仮名遣い等に直してあります。）

注

- 1 『フレールベル館一〇〇年史』フレールベル館 二〇〇八年 p.48
- 2 倉橋惣三「新しい幼年の讀物」婦人画報 一九一五年 p.105、pp.50-51

講演

「これからを生きる子どもたちへ」 津守眞氏からのメッセージ

第六回 お茶の水女子大学ECCCEL子ども学シンポジウム（二〇二二年十月）から

語り手 津守眞

聞き手 高橋洋代（立教女学院短期大学名誉教授）

構成／菊地知子（本誌編集委員）

誰もが堂々と生きられるための方途を求めて

高橋洋代 今日の特テーマは「これからを生きる子どもたちへ」ですが、子どもたちがここにいるわけではないので、この会場にもたくさんおいでになっている子どもを育てている方々へお伝えになりたいことをお話しになるということだと思っております。

先生は長く愛育養護学校で障害の子どもたちとかわられ、今もかわっていらっしやいます、そうして知ったことの中にとっても大事なことがあると思われていると聞きました。

津守眞 そもそも障碍を持つとか、持たないとか、それは一体どういうことか。私は今、子どもの後にくっついて歩きながら、自分自身が障碍を持つようになったということをもつて感じています。

また、僕は銀行にも郵便局にも行かれませんが、そんな難しいことは僕にはできないから、とてもいろいろなことについて、妻の房江にはとても負担をかけています。

銀行にも郵便局にも行かれない人間が、どうやって社会生活をするか。ちよつと立ち止まってその身になってみれば、たちまちわかつてくるでしょう。

今は不便な時代ですよ。証明書やら何やらがいろいろ無ければ社会生活ができない時代。そういうところで字が書けないだけじゃない、話ができない、おしゃべりができない、それから計算ができない、そういう人がどうやって生きていけるか。しかも、ほそぼそと生きるのではなくて、何か堂々と生きていくことができるやり方がね、あるんだと思うのです。それを見つけないということが、これからのいわば障害児教育の大きな課題だと思います。

養護学校の先生、あるいは障害を持つ子どもの学校の先生は、そんなことぐらい誰でもわかっているだろう、自明のことだと言われるかもしれないけれど、それは自明ではない。普通に字を書いたり何かしている人間が見逃している、そして偉そうなことを自分はわかっているような気がしている。けれど実は子どもほどにわかっているのです。

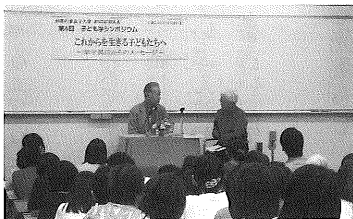
このことは、お茶大で私の同僚だった田口先生がね、時々それに深く触れることを言っておられました。元々は整形外科のお医者さんで、児童学科の先

生をしていた。そして、フルブライト教授で来られたデール・B・ハリス先生が、そのことを高く評価していました。

高橋 先生は脳出血でお倒れになって、そして今日こうしてお話ししてくださるほどによく回復なさったと思うのですが、お倒れになってから新たに生きてきた世界というのはおありですか。

津守 私はこうしてあなたに導かれて、こうやっておしゃべりすればね、ぺらぺらおしゃべりが出るのですけれど、途中でそれが止まるとね、もうどこからどういいうふうになつていつたらいいかわからなくなる。それが、いわば障害ということの一つのポイントじゃないかと思うのですね。

世の中には障害を持つ人はとてもたくさんいるわけで、その人たちも優れた力をいっぱい持っている。持っているのに、それは人からは認められず、人にもわからず、





▲津守 眞氏

過ごしてしまふ。障碍を持つた人も、みんなが気楽におしゃべりや表現ができるような雰囲気も必要なのですよね。そういう世の中を

どうやってつくっていくか。世の中というのと、ちょっと大げさ過ぎるのですけど、そういう環境をどうやってつくっていくかというのね、実は障碍児教育だけではなくて、むしろ一般教育の中で、これから非常に大事にし、また、開発していかなければならないことではないかと、私はこのごろつくづくとそのことを思っています。多分、僕の生きている間には、それはほんのちよつとしか進まないでしょうけど、それから後の時代、次の時代に向かつてね、これはきつと思ひもよらない具合に展開していくに違いないと僕は思います。

幼児期の記憶と現在へのつながり

高橋 人間の根っこを育てる時期である幼児期のこ

とで、何かご記憶に残っていらつしやるエピソードがありますか。

津守 私には祖父がいましたね、私の祖父ですから、もう本当に昔々ですが、その祖父と一緒に、ナメクジが井戸の縁に這^はっているのを、ずいぶん時間をかけてじつと見ていた。それが私の一番古い記憶の一つです。

高橋 そうですか。何かやはり津守先生らしいな。それから、先生は行列する、並ぶ、みんな一緒に歩く、円になって並ぶなど、そういうのがお嫌いだったそうですね。

津守 そうというのは、もう根っから自分が受け付けないの。三歳の時、僕、三年保育なのです。そんな昔にね、三年保育の子どもなんて珍しかったのです。でも、その三年保育の中でね、そうやってみんなが輪になって歩くと、僕はもうどっちがどっちだかわからなくなってしまつてね、いつも迷子になつて。

高橋 それもすごく先生らしい。



▲高橋洋代氏

先生のエピソードをお聞きしていると、やはりじつと観察するとか、ナメクジが子どもに変わっても(笑)。みんなと一緒に行動をすることがお嫌いだというのは、本当に先生の一生の生き方を、ある意味では象徴していると思います。

先生は、これが正しいと選択される場合に一八〇度ばつと転換されるという姿が、ご本の中にありました。先生のお父さまは戦争中に通信機の仕事をしていたらして、それが軍にも使われていたということに責任を感じられて、すべてのお仕事を五十代の時にお辞めになり、聖書を読む毎日をお過ごしになつたということで、そういうお父さまの決断は、先生の生涯に影響を与えましたか。

津守 そうですね。それはありますね。非常にあります。私の父の決める時の潔さと確かさというのは、私は実にありがたかったと思っています。私がこう

いう子どもの仕事、しかも障碍を持つ子どもの仕事に就くという時に、私の父はね、それをとても励ましてくれました。そして、心の中ではね、何かがあれば自分はすべてをなげうって助けたいと、そう思っていたらしいと、後になってからわかりましてね、親というのは本当にありがたいということをつくづくと考えました。

それは私だけではない、ここにいる皆さんがそうだと思うのですよね。父親、母親から受けたそういう貴重な財産を、みんなそれぞれがしっかりと持っているに違いない。今この、われわれの若い時代にはなかったほどの大変な時代に、その文化的財産を確かにしながら、幼いころから積み重ねてきたわれわれ日本人の思いをね、どうやって健やかに育てていくかというのが、今の日本の当面している大きな課題でしょう。

現代の課題と保育者の知恵や力

津守 今、当面している日本の課題。それはもう大

きな大きなことで、人の顔色を見ないで、自分でしつかりと考えて判断し、決めていく、そういう力を養っていかなければならない。しかし一体、今の幼児や児童、子どもたちは、どうやって身につけていくことができるでしょうか。本当に毎日、新聞を見て、テレビを見るたびに、何だか恐ろしくなるようなことがいっぱいであることは、ここの皆さん、感じておられるのではないのでしょうか。それをどうやって引き留めて、引き留めて、そして、今の時代をまともにつくっていくのかということ。その課題に向かつてね、今日、こんなに大勢おられるから、本当にそれが積み重なって、今はよくわからないけれども、日本の、また世界の力になっていくのだろうと思います。

高橋 このたびE.U.がノーベル平和賞を授与されました。戦争が頻繁に起こっていたヨーロッパで、互いの国々の大変な努力の末に、国境を越えた集団ができ、賞が贈られたことを、私は非常にすごいことだと思ふのです。日本は今、隣国との間に島の問題

を抱えています。日本が東南アジアや中国、韓国の人たちに対して行った理不尽な行為に対して、どのくらい誠実に謝ってきたかということを考えて、本当にこれから日本が払わなければいけない努力が無限にあるように思います。

津守 そうですね。本当にそうです。そのことを考えると、「現代」の責任というのは大きいですね。今、少年であり、少女であり、そして小さい子どもであり、また、成長しつつある、やや大きくなった子どもたち、この子どもたちに対して、何か私どもは大変申し訳ない思いであると同時に、何か今からでも改めることは改めて、そして、思い切って何かをやる時なのではないでしょうか。

僕は政治のことにはあまり口は差し挟まないことにしているけれど、しかし、少しでも恐ろしさを減らしていくために、私どもが引き留めていくことがあるのではないか。それをこれからもやっていきたい。私はこんな年寄りですけれども、年寄りなりに、年寄りだなんて言っていないで、その上にあぐらを

かいていないで、むしろ若々しく、そこをこれから挑戦してやっていきたい。それは私自身の、現在、毎日思っている課題です。

高橋 本当に重い課題ですが、保育をする者として避けて通れないことですね。先生の本から、先生が一貫してお変わりにならない、縦軸がまったくぶれないことがわかる。でも、横軸で見ると、子どもを前にした時、また、留学生活の中でも、非常に柔軟に、自分の過ちをちよつと反省して、また困って、また気を取り直して、という横のぶれがたくさんあるのです。それでも、やはり縦の線を一貫して持つていらつしやる。その中心には、津守先生の場合は、キリスト教の信仰がおりになるように思います。そういった、人間として持つているものが、やはり保育者の子どもの見方や子どもへのかかわり方などとながつているのでしょうか。

津守 人間として、まともに生きていくのにどうするか。これはキリスト教だからどうかとか、仏教だから、浄土真宗だから、あるいは何宗だからどうか

なんて、そういうことを超えて、これからの日本が世界に対して貢献していく道ではないかと思えます。それを超えてね。これには、まだあと何百年か何千年かかかるのかもしれないけれど、それだけの時間をかけて、私どもがこれから本当の良い道をつくっていく。本当に長い長い時間をかけないとできないけれども、でも、誰かがちよつとずつちよつとずつそれを積み重ねていく、その大きな力になるのは、やっぱり保育者だと思うのです。でも、保育者なら誰でもいいかという、必ずしもそうは言えない。保育者というのは、いつも子どもに触れて、子どもと一緒に考えて、そこから知恵を与えられて生きていく人間です。これからまだ私どもも、みんな年を取っていきます。でも、年を取っていくけれども、同時に何かそこで本式の、本当の道に立ち戻っていくのにどうするかという、そういう力も同時に与えられてあるのではないかと思えます。

注 『私が保育学を志した頃』ななみ書房 二〇一二年

イタリア保育

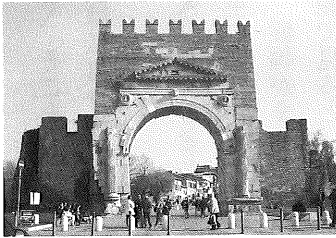
おもいきって

参観記 (2)

「園への両親の参加」 エミリアローマニヤ州リミニ市

金澤妙子
(大東文化大学)

勤務先の海外長期研修制度で、私は今、イタリア・エミリアローマニヤ州リミニ市に、二〇二二年四月から一年間の予定で滞在している。七年前に五か月間の短期海外研修を同州ボローニヤ市で行った際、当地訪問を勧められたことがきっかけである。本連載ではリミニ市を中心に、他市の保育も紹介していく。今号も、リミニからのレポートである。



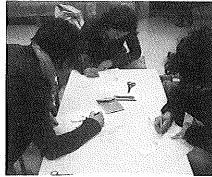
▲紀元前27年アウグストゥスの門

ラボラトリー・コンジェニトリ
Laboratorio congenitori
(両親との作業/以下、文中ラボと略記)

二〇二二年四月～六月末私が参観した保育園には、3・8か月、15・20か月、21・26か月、27・32か月の四クラスがあった。21・26か月クラスの参観時、保育者が「今晚八時半からラボがあるけど、来る？」と言うので、もちろん見せてもらうことにした。

16時、子どもがみんな帰って、保育者も私もひとまず家へ。20時45分に園に着くと、二人の保育者と、このクラスの担当の アウシリア Ausiliaria (食事と掃除を軸に保育者を助ける)、六人の母親がいた。母親たちは二

人組になって絵本の絵を描き写している。この園のプロジェクトは「生活習慣の自立」。このテーマのもと、発達や年齢を踏まえ各クラスでさまざまな試みをしてきた。この絵本の語り聞かせもその一つだった。21時05分、箱を抱えてもう一人登場。しばらくすると、アウジリアーリアがリングのタルトと飲み物を運んできて、しばし談笑……。



このクラスは、プロジェクトとして当番活動を入れていた。午前のおやつの時、ボウルに入った果物と5cmほどの使い捨て容器の底に（傾けてもこぼれないように）2cm弱入った水を配る。園の壁面には、昼食メニューを張るドキュメンテーション。これも当番の仕事だ。その前で、飲み物を手に、保育者が母親に日ごろ子どもがどうするのかを説明している。別の所では、「今日うちの子、当番だったんですよ。上手にできたよって言ってたわー」と保育者に話している母親。「当番よ」と言われてもぼうっととしていて、私は、意味がわかっているのかな？ この年

齢ではどうなのかしら、と違って参観したが、母親の言葉に、子どもの内面は違っていたのかもしれないと思った。この日、子どもの輪の中から出され、椅子に座らされる罰を受けた子がいた。今日はこんなことがあって、とても強く叱ったのと、保育者は母親に説明していた。こうして集まる直接の目的とは別に、親は園でのわが子の姿を、保育者は家庭での園児の姿を知る機会になっているようだ。

一休みして作業を続け22時30分、一人帰ったが、ほかの人は子どもの話をしている。手を洗いに行き、その先のトイレに置かれた椅子と本、そこで本を広げている子どもの写真が子どもの目の高さに張っているのを見て、しゃがみ込み、「ここで本を読んでいるのね」と本を開いたりしている。手洗い場にわが子が手を洗っている写真を見つけ、「あー、フランチー」と叫んでいる母親もいる。23時近く、「また明日！」と帰っていったが、片付けを手伝い、23時過ぎ、私が園を出ると、外には四、五人の母親が「いっつもママ〜って言ってるわ」などと立ち話をしていた。

現場での話し合いで

「保育者が家庭にプロジェクトの内容を知らせる。年間を通して同じテーマなので、家では、園でやっていることがわかる」。ある保育者は、プロジェクトについてそう説明した。協力してもらいやすい素地はあるかもしれない。だが、母親たちはこうした集まりを、本当はどう思っているのだろうか。市役所のコーディネイナメント部署に所属し、上司・調整役として回って来る コーディネイナトリージェ コーディネイナトリージェ を交えて保育者と話していて、親と協力して子どもを育てていくことが親を育てていくことにもなるという話になった。私・保育園はほとんどの母親が働いている。安全に預かって返してくれさえすればいい、夜集まって作業するのは嫌だという親はいないの？ コーディナトリージェ・イタリアでも保育園は働く親のためにあったが、今、少し状況が変わってきている。教育に関して力のある人が、子どもは両親が育てるものだという発言をしていて、親の意識もそ

ういう方向へ動いている。私たちは、その支援者。保育者（3・8か月クラス担当、50歳代半ば）..ほんとは年に少しだけよ。あの日をつくるのは、とても難しい。年度の初めに両親の代表を決めるの。園からの連絡や情報伝達はその人たちからしてもらおう。

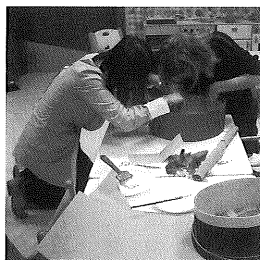
私..手を挙げてくれる人はいる？

保育者..すぐに自分からということはないわね。「誰かやってくれらるとうれしいわ...」とは言うけれど、絶対に強制はしないのよ。「どう？」と勧めたりもするけれど、母親たちは「んー」と尻込みする感じね。でも辛抱強く待っていると、誰かが申し出てくれるの。今まで、決まらなかったことはないわ。中にはラボでほかの両親と知り合いたいという親もいる。これがきっかけで、チャット、メール、フェイスブック、電話などで交流している人もいるわ。うちのクラスのママたちはラボで集まるのをうれしいと言っている人もいる。全部じゃないわよ。でも、同じ乳児を持つ親として悩みを共有したり、例えば野菜が嫌いな子にどうやって食べさせたらいいかと

か、情報交換しているわ。

幼稚園でも

幼稚園ではプロジェクト「物語る」のもと取り上げた各クラスの題材（本誌前号参照）を、保護者がミックスして新たなストーリーを作ったそうだ。台本を書き、配役、舞台監督・演出、衣装係などを分担し、ラボでは、衣装合わせや舞台（庭だが）練習をしていた。私はこの日、朝から園

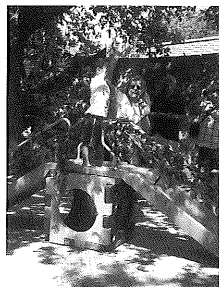


に出かけ、一休みして、夜ここに来たが、とても疲れた。ほぼ同等の労働を、集まったどの人もしていることだろう。

後日、今年度のラボは四回だったと聞いた。大変だなど苦情はないのかと尋ねると、「それどころか、保護者のほうから積極的に提案して動いてくれ、感謝している」という答えが返ってきた。ある時は、五歳児の母親たちが修了帽作りに来ていた。普段、その時間は勤めているが、休みをもらったそうだ。

園行事 (FESTA)

イタリアの幼稚園・保育園の大きな園行事は、クリスマスと年度末（六月）の二回。幼稚園の卒園・進級の会では、いつもの滑り台が月桂樹やラベンダーで飾り付けられていた。驚く私に「ママたちよ」と保育者。プロジェクトで全クラスに共通したオオカミ。子どもと保育者で作ったオオカミの旗がはためく園庭に、子どもも保育者もおそろいのオオカミのTシャツで集まり、父母の演じる劇を楽しみ、大人も子どもも共に輪になって踊った。その後、担任に名前を呼ばれて促され、拍手の中、照れ気味に、あるいは元気に滑り台のてっぺんに立つと、担任がママの作った修了帽をかぶせてくれ、修了証書を手渡す。担任の促しで高く挙げられた手に呼応するように会場から「ブラボー」「○○（子どもの名前）ー」の声。ビデオやカメラが構えられる中、子ども





は滑り台を滑り降りた。練習なんてない。好評を博したオオカミ役の父親は、この日も、その後わが子を迎えに来た時も、保育者や子どもに「オオカミ！」と声を掛けられ、園児にまわりつかれていた。

新たな園でも

新年度十一月初めから、私は別の保育園・幼稚園に通っている。保育園では、決定した両親代表にメールアドレスを知らせてほしいという張り紙が各クラスのドアの脇に張られていた。

図書の管理は保護者の担当で、親子・家族でのしおり作りのラボが行われ、新年度の貸出準備が整ったところだった。十一月下旬の幼稚園の玄関と各クラスのドアの脇にはクリスマスラボのお知らせが張り出された。そして、十二月最初の参観の日、ホールの天井いっぱいにおーナメントがつり下げられていた。写真を撮っている私に、通りかかった保育者やアウジリアが「どう？ ママたちよ」「きれいでしょ、

ラボよ」と言う。前の週、五歳児クラスで、当番が毎日、日付と曜日、天気を書き込んで作っていくカレンダーの空白が二日だけになって、「クリスマス月の月が来る！」の音があちらこちらから出た。私の脇で「この季節が一年の中で一番いちばん好き！家の中がすつごーくきれいになるの」と、いつになくはしゃいでいたアウローラは、「これ、私のママが作ったのよ！」と、飛び跳ねて手を伸ばして教えてくれた。

詳しく聞いていくと、フェスタの滑り台のアイデア、子どもと両親へのオオカミからの招待という、フェスタの案内状の粋な計らいは、保育者だった。しおり作りも「初めに見本を作って見せただけよ」と言うからには、保育者はそこに居た。オーナメント作りも、木の実や枝、麦、乾燥した豆・オレンジ・ザクロ・トウガラシ、シナモン、パスタなど、身の回りの多様な素材を、保育者は親以上に準備していた。「ママたちよ、両親よ」と言う、そのどこにも保育者の存在はあった。―次号はフィレンツェから―

報告

松野クララ記念歴史に学ぶ会

第一回講演会報告

宮里 曉美

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

顕彰碑建設を記念して、歴史に学び、今そして明日を創り出す会をつくっていかうという声が集まり、松野クララ記念歴史に学ぶ会が発足し、平成二十四年十一月三日、顕彰碑をお参りした後に、第一回目の講演会を実施しました。

◇顕彰碑に花をささげ、語り合いが始まる

青山霊園外人墓地内にある松野家の墓は、大きな松の木が目印です。顕彰碑にはきれいな花が飾られました。



青空が広がったさわやかな秋の日、顕彰碑の周りでは、一年ぶりの再会を喜ぶ声や、顕彰碑を眺めながら懐かしく語り合う人々の姿が見られました。

◇歴史をたどる講演会

演題 「木戸孝允の人柄とその先見性と情緒、木戸侯爵家について」
講師 和田昭允氏（東京大学名誉教授、お茶の水女子大学元理事、名誉学友）
会場 青山フロラシオン 松の間

日本の林業教育の先駆者であった松野^{ほま}碯はドイツ留学中にクララと知り合い、互いに愛を誓い合いま

した。二人の結婚は、松野が帰国した後に日本で実現するわけですが、結婚を支え実現へと導いた恩人ともいえるべき人が木戸孝允であり、和田先生は、その曾孫にあたられます。



▲和田昭允氏

講演会では、詳細な資料や写真などをもとに、木戸孝允の人柄や先見性についての話をお聞きし、明治という時代に思いをはせる時間となりました。

その後、参加者からの質疑応答の時間となり、歴史についての熱い語り合いが続きしました。参加者の声を幾つか紹介します。

○松野クララを語る上では欠くことのできない話をお聞きできた。「木戸孝允日記」の中に、クララのお話が詳細に書いてある。「クララは、はるばる海を越えてやってきた、まことにけなげである」と書いている。木戸は直接に関係のない人のことをよく面倒を見ている。クララに同情し助けている木戸は、情の人、情緒の人だと思う。

○一年前に顕彰碑の除幕式に出させていただき、その後の茶話会で和田先生が木戸の子孫であること知り、ゆっくり話を伺いたいと思っていた。松野クララが日本で最初の幼稚園の主任保母となった顛末を「幸運なことには」と書かれていることがあるけれど、そうだろうか。ある程度予定されていたのじゃないかという考えも浮かんでくる。

○松野圃の帰国後、クララが一年ドイツに残ったのは、幼稚園教師の免許を取るために必要な時間だったのではないか。日本に来て、クララは豊田英雄や近藤濱にきちつと幼児教育を教えている。これは急に頼まれてできることではないと思う。

次々に語られる意見は興味深く、さらに考えていきたい内容ばかりでした。歴史の面白さ、奥深さに触れた一日でした。



周郷博講演「現代の幼児教育」

— 第七十巻第四号（一九七一年四月）より —

周郷博（すこうひろ）（一九〇七—一九八〇）は教育学者であり、『母と子の詩集』など小さい子どもを育てる人へ向けて詩やエッセイも書いた。今回ご紹介するのは、一九七〇年七月のお茶の水女子大学 日本幼稚園協会主催の「幼児教育講習会」における講演の一部である（周郷は当時、お茶の水女子大学教育学部教授、附属幼稚園園長）。不幸な生い立ちを生きた詩人が残した珠玉の詩を引きながら教育について論じている。

周郷自身（本誌第七十七巻第三号掲載の対談による）、中学を卒業しておらず、新聞配達をしながら夜学の電機学校に通い、電球工場や変電所などで働くうちに洗礼を受け、十五歳で関東大震災に遭うなど、多難な青年期を過ごしている。その後、独学で中学検定試験に合格、苦学して一高、そして東大に入学。賀川豊彦のセツルメントにかかわる。肋膜炎を長く患うが卒業、一九三三年文部省入省、一九四八年お茶の水女子大学に赴任。ここでは、二十一歳で逝った青年の言葉に打たれ、周郷は、教育の意味を問い、学校教育の無力さ、いやむしろ有害にさえ作用していることへの怒りをあらわにしている。

（本誌編集委員 浜口順子）

〈講演〉現代の幼児教育（一九七一（昭和四十六）年 第七十卷第四号）

周郷博

—略—

矢沢宰君の「光る砂漠」^注という詩集があります。

矢沢君というのは、四年前に二十一歳で死んでしまった人です。彼の詩や日記を読んで、八十七歳の内藤濯先生が大変興奮して、君は、えらい問題をしょっている。僕は、十数年前、「星の王子さま」とめぐりあったんだけれど、「星の王子さま」と共通した大きな問題にぶつかっているんだ」というふうな僕のところへ電話してくるんです。（中略）

矢沢君のお母さんも、死んだ宰が、先生のような人にもみてもらいなさいといっているような気がして、詩を僕のところへ送ったんだというんです。どうも僕は、子どもの時から、そういう運命をせおってきているような気がします。

今の教育というのは、全体として形だけはあるけれども精神はなくなっちゃったわけね。それは、経済成長というものの中でやっと維持されているというものです。教育の制度全体が七〇年代に役割を果たすことのできるものではないんです。制度として認められている教育ではないところで、本当の教育がおこっているということを感じます。

ルソーでも、ペスタロッチでも、フレーベルでもそうですよ。今や、世の中があまりひらけちゃって、できあがってしまったものは生命を失っているわけですから、こういう時代に、本当の教育は人の気がつかないところで、始まっているんだということを感じます。矢沢君の詩と日記は、こういうことを語っていると思います。

矢沢君は、八歳の時から腎臓結核で、ひとつ腎臓をとってしまいました。おじいさんとおばあさんが農業の仕事をしているんですけど、お父さんはやはり結核なんだな、家は貧乏で、お母さんが一人で暮しをたてていたのですけれどね。そして十三歳まで小学校にいますが、小学校の五年生までしか行っていないで、一年おかれて形だけ卒業するのです。その時は、もうひとつの腎臓もひどくなってしまっていて結核病院にかつきこまれるのです。

小学校五年生しかいっていないのに、どうしてあんなにきれいなことばが出てくるのか驚くべきことだね。それは、生まれつきというふうに考えたってその解釈にはならない。環境かといつて環境でもその説明にはならないんです。きのう自動車の中で内藤先生はうまい説明をしました。矢沢君は、自分の心の中に学校をもっていたんじゃないだろうか、生まれたときからずつと、心の中に学校をもっていたんじゃないだろうか。そういうふうに見えるより仕方がない。

ところが、今、ふつうの子どもたちが育つ環境はどうですか。そもそも、家庭で、一人の間になる初期の教育、たしなみという意味の教養がなされないで、人がかりでしょ、あそこの幼稚園に入れればいいのか、あそこの小学校がいいとかね。人がかりにしている所は、教育なんてない所なんです、入ってれば入ってほどよくないんです。

それまで、寝たきりでしたけど、矢沢君は十七歳の時から立てるようになりましてね、病院の中に付設されてある中学部に入って、手押車で行って、いっしょうけんめい勉強しようと思いました。そして二年で中学校を卒業して試験をうけて高等学校へ入るんです。ちょうどその頃に体の具合がたまたま少しい具合になってくるんです。それで退院して一年半、高校へ通

うんです。学校へ行くようになったら勉強がおもしろくなっちゃうんです。矢沢君の日記がここにありますが、学校というところへ入ると、勉強する気があんまりなくなってくるのね。それをね、今、幼稚園からそういうふうには、あおっているんですね。

これは、どういうことでしょうか。学校というところは、本当に勉強しようとする気持ちをこわしてしまうところなんです。知識に対する発見と、おどろきをなくしてしまうところですよ。(中略)

これは矢沢君の十五歳の時の詩なんですけど、

おれの中に／もう一人／すばらしい／人間がいて…／
そいつと／しっかり／手をむすんで／生きて／行きたい

(原文の改行部分を／で表しました——編集部)

おれの中に、もう一人すばらしい人間がいてだね、それが、サン・テグデュペリにとっては、砂漠で会った星から来た王子さまが自分の中にいるもう一人の自分なんです。だから、自分の中で対話しているわけです。しかし、十五歳の、小学校五年しか行かない子がね、そして貧乏で病気で、不幸な少年が、どうしてこういいういことばをいえるんでしょうかね。(中略)

そして、もっと前の十四歳頃に「あきらめ」という短かい詩をかいています。僕は、日本国民がいつしよにこういう決意をしなければいけないと思うのです。

あきらめてはならぬものを／あきらめて／あきらめてよいものを／あきらめず／
こんなのがわたしの／なやみのたねになっているのでしようか？

この頃に、矢沢君は、生きるという決意を本当に純粹な形でしますよ。わずかしか生きられないにしても、生きるということは意味のあることだという。そこで、生きるということとは、あきらめちゃいけないということを、自分にむかっていつているわけですね。

日本国も、こういう決意をするべきじゃないでしょうか、あれも欲しい、これも欲しいじゃ、何もできないんです。何かあきらめなければ他の問題がはつきりしてこないわけですよ。経済成長も欲しいし、平和も欲しいなんてわけにはいきませんよ。お金も欲しいし、人間としての気高さも欲しいなんていったってそうはいかないよね。この矢沢君の詩は、僕らにむかって全体に語っているような気がするんですけどね。僕らの気持は、汚れちゃってますよ。その汚れを払いのけなければやるべきことがはつきりしてこないわけです。(中略)

今、新潟で洋服屋をやっている、いっしょに病院に入っていて彼の大変親しい親友になっていた人と二人で話したことが、次の長い詩になっています。僕らもこの矢沢君の詩によって教えられているのだと思いますけどね。二人で話したことです。

これからどうなるんだろう？／二人でベッドにねそべりながら考える／

高校へ行きたい／俺達は何もできないから／勉強をやっておいたほうがいい／
でも家がびんぼうでなあ……／商売をやりたい／しかしこんな体ではなあ……／

結論はなるようになるだろう?…… / そしたらそうだった所で /
一生懸命やろうと / 言う事だった

未来に対して夢はあるよ / 何かは出来ると思う / これまで生きてこられたことは /
神が俺達に何か役にたたせようと / 思つての事かもしれないから

そうかんがえれば俺達はなんの力もないようだが /
どうにかして生きていけないこともないように / 思うなあ

僕は、この中で「そしたら、そうだった所で一生懸命やろうと言うことだった」というところは非常によくわかるんですけどね。初めから東大へ入ろうとかさ、人よりも先に走つてた方がいいとか、はじめから未来をしばつておいやいけないんですよ。未来は解放しておかなければいけないですよ。「そしたら、そうだった所で一生懸命やろう」という十六歳の二人の少年の心は実に美しいと思いますよ。(中略)

幼児教育とか、これからの教育を考える時、本当に知るといふことは何でしょうか。知るといふことは、ものをたべることよりも、もつとはりあいのあることでしょ。発見のおどろきがあるわけですよ。知るといふことと、生きるということが、所有すること以上に、人間にとって生きがいでなきやならないような時代が来なければ地球は滅びちゃうんです。——略——

注 矢沢幸詩 / 周郷博編『光る砂漠』童心社 一九六九年

ひろば

お便り

POST

◇ 読者から ◇

誌面でお名前を存じ上げた方に授業などを通してお目にかかれると、「私の先生を知ってるわ」と、とてもうれしくなります。逆もまたしかりで、お目にかかった方やお話の中に出た方のお名前を誌面でお見受けするのも楽しみです。

実際の人とつながると、「幼児の教育」が、よりいっそう身近に生き生きと感じられるから不思議です。

(ECELL 社会人プログラム受講者)



● 編集室だより ●

11月29日、茨城県大洗町の幕末と明治の博物館で開催された「日本人初の幼稚園保姆 豊田英雄」展を見てきました。136年前に英雄が日本最初の保姆として東京女子師範学校附属幼稚園に赴任したちょうどその日で、数奇な運命を強靱な意志で生き抜いた女性を一層間近に感じられたような気がします。

地元新聞のインタビューで晩年「私はなにも成し遂げなかった」と謙虚に語っていたことを知り、「最初の保姆」であった事実は生涯教育者として生きた英雄にとって一つのプロセスだったこと、想像し難いほどの人生の重厚さに、圧倒される思いでした。(J)

本の紹介 『さくらの気持ちパンダの苦惱』
唐亜明 岩波書店 2010年

軽妙にして痛快な、気持ちが重くならず読める日中比較エッセイ。中国で生まれ育ち、長く日本に暮らしている著者は、現在日本の出版社の編集者であり、数多くの優れた日本の絵本を中国語に翻訳もし、また、何冊もの日本語の著書も出されている。著者ご本人はそうとはあえて言わないが、相当の「逆境」を生きてきた方である。語学番組テキストに好評連載されていたエッセイをもとにまとめられた本著は、はっとさせられたり、うなずかされたりすることの多い、なかなか出会えないバランスの良い一冊だと思う。

中国(人)と日本(人)とでは、仕事の仕方、同じ言葉に対するイメージ、自国に対する意識や態度、何もかもが異なる。国と国との対立や摩擦ばかりが目につく今という時代であるが、人と人とは異なりつつ人として出会えるのだと、改めて思う。(K)

日本保育学会第66回大会が福岡市中村学園大学・中村学園大学短期大学部を会場に開催されます

日本保育学会第66回大会 概要

会期：2013年5月11日(土)・12日(日)

会場：中村学園大学・中村学園大学短期大学部
(福岡市城南区別府5-7-1)

大会テーマ：「未来を育む」

特別講演講師：土井高德氏

(土井ファミリーホーム代表)

内容：大会講演・特別講演・社員総会・授与式・
研究発表・シンポジウム

詳しくは大会HP参照

<http://jsrec.or.jp/hoiku66/index.html>

エピソード

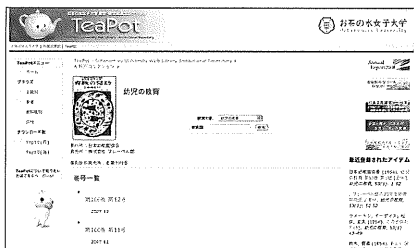
手元に届いていた角尾稔先生の一周忌で作製された冊子、『ふたつの円』をていねいに読み返してみました。『幼児の教育』に昭和30年代掲載の記事と特集が収められていて、ここにもつながりが、と引き込まれました。ふたつの円はご夫妻の人生の重なりを表しているそうで、すてきな題にも感銘を受けました。

津守真先生の講演録、当日の先生のお姿を思いながら読み進めると、深く心に染みてきます。「若々しく挑戦していきたい」という言葉、春を迎えて私たちも胸に刻みたいものです。本田和子先生も久しぶりに連載で登場です。本誌にゆかり深いお二人と共に、季刊『幼児の教育』も三度目の春号です。色も大きさも異なる幾つもの輪が重なり、さらに魅力的な誌面になっていくよう歩み続けていきたいものです。(E)

幼児の教育 バックナンバーを WEBページで公開中

「幼児の教育」または「TeaPot」で

検索 



<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/3705/bulletin/>

明治34年発行の創刊号から、現在、平成21年発行の第108巻までご覧になれます。

なお、自由投稿、「ひろば」への情報などお待ちしております。
nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jp まで。

次号予告 幼児の教育 夏号 2013年6月刊行予定

新企画も好評! 充実した内容でお届けします。

特集 問い直そう、保育の中のあたりまえのこと10 - 規範意識って何だろう? -
山口大学教育学部附属幼稚園での座談会ほか

シリーズ 子どもが育つ場所を訪ねて - 那覇市立金城幼稚園(沖縄県那覇市) -

新企画 幼稚園の世界的展開におけるマイヤー姉妹の貢献 大戸美也子先生

※タイトル・内容が変更になる場合もあります。

幼児の教育 春号 第112巻 第2号

平成25年4月1日発行
編集発行人/浜口順子
編集担当/田中恭子
発行所/日本幼稚園協会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発売所/株式会社フレーベル館
電話:03-5395-6657(編集)
振替/00190-2-19640
印刷所/図書印刷株式会社
定価/750円(本体715円)
©日本幼稚園協会 2013 Printed in Japan

編集委員/伊集院理子
上坂元絵里
菊地知子
佐治由美子
宮里暁美
編集協力/フレーベル館

●ご購入のお問い合わせは、フレーベル館までお願いします。03-5395-6613(営業)●

保育所 発達段階に着目した 12か月の指導計画

民秋 言 / 著

年齢に応じ、個から集団までを見据えた内容

『発達過程に着目した指導計画作成のすべて』の実用版。保育にすぐに役立つ

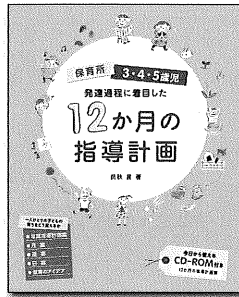
毎月の指導計画面と保育のポイントを掲載。 26×21cm 336ページ 定価各3,150円(税込)



保育書
0・1・2歳児
発達過程に着目した
12か月の指導計画



10924



保育書
3・4・5歳児
発達過程に着目した
12か月の指導計画

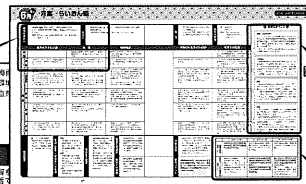


10925

すべての指導計画面の文例を掲載した CD-ROM 付き! ※for Windows Windows7 対応

発達過程を押さえて 指導計画をパワーアップ!

年齢区分	内容
前月の子どもの姿	○保育所の様子、子どもの様子、保育の中で、快活に遊ぶ様子。 ○保育所の様子、子どもの様子、保育の中で、快活に遊ぶ様子。
子どもの成長	○子どもの成長や発達過程に関する、保育の様子や様子、子どもの様子、保育の中で、快活に遊ぶ様子。



保育のポイント

指導計画面の養護と教育のポイントをていねいに説明。保育のヒントが満載!

養護 (生命の尊厳)
一人ひとりの子どもが安心して生活できるようにするには、平常の発達状態や育ちおよび発達状態を的確に把握し、日々のその場における健康観察による、異常な状態や身に気づかし、適切な対応をとることが重要です。
また、子どもが自らの体の異常を訴えられるような環境であることも大切です。

発達過程表の抜粋

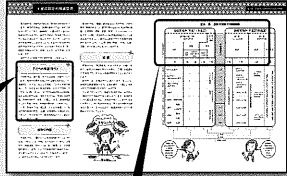
指導計画面の作成にかかわる発達過程表の該当部分を抜粋。

自然の要素	vi おおむね4歳
自然の要素	自然などの身近な事象に関心をもち、遊びや生活に取り入れようとする。

新・旧指針の相補関係から保育を把握!

旧指針と補い合いながら、新指針を詳しく解説。

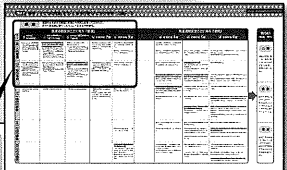
子どもの発達(育ち)
目標では、第2条「子どもの発達」で明記されています。保育者は子どもの発達を十分に把握し、子どもの発達に合わせた保育を行うことが重要です。この指導計画では、子どもの発達を把握するための「育ち」を、保育者の視点から捉え、保育の視点から捉えています(4歳、5歳、発達過程表の各項目(項目)の対応がなされています)。
一方、第3条では、発達「育ち」の観点で、「発達過程表」の項目(項目)を、保育者の視点から捉え、保育の視点から捉えています(7歳)。



内容	旧保育指針(平成11年改訂)				新保育指針(平成20年改訂)			
	1歳	2歳	3歳	4歳	1歳	2歳	3歳	4歳
発達の過程								
保育の視点								

新・旧指針の「内容」をまとめたオリジナル発達過程表!

「発達(育ち)の連続性」と「発達過程区分」の視点で、新・旧指針の内容を並べて作ったオリジナル発達過程表。指導計画の作成に役立つ!



環境	発達過程区分ごとに見る		
	おおむね6か月未満	おおむね6か月から1歳3か月未満	おおむね1歳3か月2歳未満
人的環境	<p>※安心できる人との関係の下で(保育士に見守られながら)安心して遊ぶことができるようになる。また、保育士との関係が重要になる。</p>	<p>※安心できる人との関係の下で、聞く、指を触る、聞く、叫ぶなどの発達の過程を体験する。また、保育士との関係が重要になる。</p>	<p>※保育士に見守られ、外遊びを十分に楽しむ。また、保育士との関係が重要になる。</p>
環境	<p>※安心できる人との関係の下で、聞く、指を触る、聞く、叫ぶなどの発達の過程を体験する。また、保育士との関係が重要になる。</p>	<p>※安心できる人との関係の下で、聞く、指を触る、聞く、叫ぶなどの発達の過程を体験する。また、保育士との関係が重要になる。</p>	<p>※保育士に見守られ、外遊びを十分に楽しむ。また、保育士との関係が重要になる。</p>

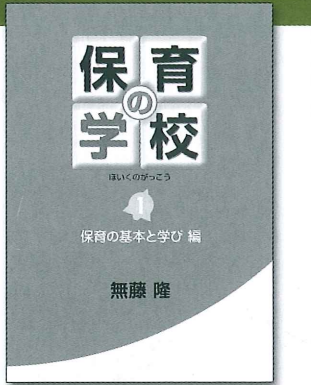
好評発売中

保育の学校

平易な言葉でわかりやすく。
保育をふりかえり、考え、
深めていくための16講義。

無藤 隆 / 著

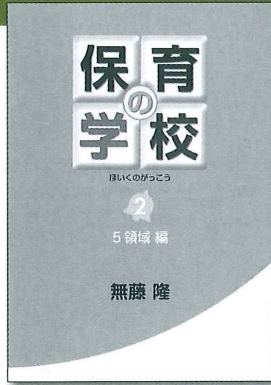
21×15cm 136ページ 定価各1,365円(税込)



保育の基本と学び 編

10931

養護と教育の一体的保育、教育課程・保育課程と指導計画や、数・図形、文字などについての講義。



5領域 編

10932

「健康」「環境」「人間関係」「言葉」「表現」の5領域と、体験の多様性と関連性についての講義。



5つの今日的課題 編

10933

子育て支援、評価、小学校との連携、特別支援、食育、保育の5つの今日的課題についての講義。

予習

● 目的
● 内容
● 解説

講義

● 目的
● 内容
● 解説

● Point ●

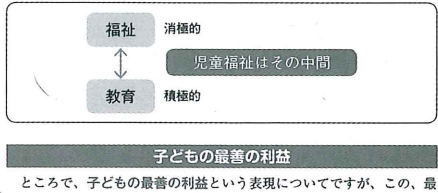
保育を考えるために、16のテーマを設定。すべての講義が

予習→講義→まとめ→小検定

で構成されているので、園内研修にも最適です!

う言葉が入っているわけです。

◆図1 教育と福祉の関係



▲図解でわかりやすく!

2) 「子どもの最善の利益」を英語ではどう表記するでしょう。選びなさい。

1. good interest 2. better interest 3. best interest

3) a, bに入る言葉を選択肢から選びなさい。

保育所は、(a) でなければならない、という表現をしています。教育学を勉強するから、この、(b) という言葉がややこしい言葉であるということを書き添えるをいいうのですけれど、例えば、教育要領においては、幼稚園は教育の場なのです。教育要領の中に、(b) という言葉はあるにはあるのですが、(a) という表現はないと思いま

▶ポイントを再確認!

定価 七五〇円(本体七一五円)☆

キンダーブックの **フレール館**

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所
または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。